20.　熊本　熊本県立東稜高等学校　別添資料

【別添資料１】　学校防災年間計画
【別添資料２】　防災教育（Ⅰ）～（Ⅳ）年間計画
【別添資料３－１】　3 年　小論文コンクール　評
【別添資料３－２】　2 年　小論文コンクール　評
【別添資料４－１】　防災グッズ　アイディアコンテスト
【別添資料４－２】　防災グッズ　アイディアコンテスト　チラシ
【別添資料４－３】　防災グッズ　アイディアコンテスト　結果
【別添資料５－１】　Ｐ１チャレンジ計画書
【別添資料５－２】　Ｐ１チャレンジモニター実施報告書
【別添資料５－３】　Ｐ１チャレンジモニター実施報告書
【別添資料６】　生徒防災委員会提案趣意書職員用
【別添資料７】　防災関係　学校評価
【別添資料８】　防災通信（1 学年）
【別添資料９】　防災通信（2 学年）
【別添資料１０】　防災通信（3 学年）
【別添資料１１】　コミュニティースクール
【別添資料１２】　防災通信
【別添資料１３－１】　防災教育（Ⅳ）指導案
【別添資料１３－２】　防災教育（Ⅳ）事前配布資料
【別添資料１３－３】　防災教育（Ⅳ）学習シート①
【別添資料１３－４】　防災教育（Ⅳ）学習シート⑤
【別添資料１３－５】　防災教育（Ⅳ）学習シート⑥
【別添資料１３－６】　防災教育（Ⅳ）評価表
【別添資料１３－７】　防災教育（Ⅳ）報告書

【写真資料】

別添資料１

平成29年度熊本県立東稜高等学校　学校防災年間計画

月	防災教育		防災管理　組織活動
	教科	特別活動	関連行事
4	■数学・数学Ⅱ（2年） 指数対数関数において地震の大きさを示すマグニチュードの計算に利用されることを知る ■地歴公民・日本史A(2年) 安政地震について知る ■地歴公民・地理A(2年) 火山活動と災害で地震災害について学ぶ	■防災に関する科学研究（理数コース）(4/18)	■生徒防災集会（来年度より）(4/16) ■第1回防災主任研修(4/27)
5	■情報・社会と情報（1年） 情報モラル・震災時の情報収集でSNSが果たした役割を学ぶ。また昨年の動物騒動をもとに、情報の見極め方を学ぶ。 ■数学・数学Ⅰ（1年） 2次関数・情報を得るためにパラボラアンテナに放物線を利用していることを示す。 ■地歴公民・政治経済（3年） 財政、補正予算で災害対応予算を知る ■地歴公民・地理A(2年) 地形と災害で崖崩れと洪水対策について学ぶ	■生徒議会（生徒防災委員会設立のための生徒会規約改正）(5/25)	■生徒防災委員会設置(5/25)
6	■理科・地学（3年） 地震と災害について学ぶ ■数学・数学B（2年） ベクトル・力を表すのに有向線分が利用され風向きなどに使われていることを知る。 ■地歴公民・地理A(2年) 熱帯低気圧と災害について学ぶ ■国語・国語総合 『羅生門』を取り扱う中で、災害時の心理について考える。	■生徒防災委員会(6/12)	■防災通信発行(6/20) ■第1回安全教育事業推進会議(6/23) ■第１回学校運営協議会(6/29)
7	■理科・地学（3年） 地震と災害について学ぶ ■数学・数学A（1年） 場合の数・確率・降水確率など確率の意味を知る ■地歴公民・日本史B(3年) 明暦の大火について学ぶ ■地歴公民・地理B(3年) 村落の立地と災害対策について学ぶ	■防災教育Ⅰ（LHR）(7/6) 1年　防災における心構えと基礎知識 2年　AED・救急救命研修 3年　避難所運営シミュレーションゲーム ■ 防災に関する小論文コンクール（3年）(7/20)	■防災通信発行(7/4) ■避難訓練Ⅰ(7/6) ■オープンスクール（防災教育）(7/6) ■職員研修（本校の防災教育、防災の基礎知識）(7/10) ■防災通信発行(7/14) ■校内安全点検(7/14) ■先進地視察(兵庫)(7/26-28)
8		■東北×熊本　復興PHABATAKI参加(8/3-8) ■地震火山こどもサマースクールIN益城町(8/9) ■HUG研修参加(8/22) ■多賀城高校との交流(8/24-25) ■生徒防災委員会 (8/29)	■第2回防災主任研修(8/9) ■校内安全点検（校外点検・学校安全アドバイザーとの打ち合わせ）(8/23) ■岡山玉野光南高校学校訪問(8/29) ■第２回学校運営協議会(8/30) ■防災通信発行(8/31)
9	■地歴公民・日本史A(2年) 関東大震災について学ぶ ■地歴公民・日本史B(3年) 島原大変肥後迷惑について学ぶ ■地歴公民・現代社会(1年) 地方自治について学ぶ	■文化祭発表(9/8) ■京都東稜高校との交流(9/15) ■人と防災・未来センター研修(9/16) ■安全マップ作成 (9/25) ■防災教育Ⅱ（LHR）(9/26) 防災の専門家による講演会	■防災通信発行(9/5,9/22,9/26,9/29) ■職員研修(安全マップ)(9/11) ■アクサユネスコ東北教員研修(9/18-20) ■オープンスクール（防災教育講演会）(9/26) ■避難訓練Ⅱ(9/26) ■第２回安全教育事業推進会議(9/26) ■多賀城高校学校訪問(9/28)
10	■英語・英語表現Ⅱ（2年） 「L.12ボランティア活動」：震災時を含めたボランティア活動体験や感想を表現させる。 ■家庭・家庭総合（1年） 被服分野、燃えにくい素材について学ぶ	■大阪府立三国丘高校との交流会(10/2) ■防災に関する小論文コンクール（2年）(10/6) ■防災アイディアグッズコンテスト(10/6) ■生徒防災委員会(10/30)	■SPS視察(10/3-5) ■校内安全点検(10/13) ■防災教育（Ⅲ）学校安全アドバイザーとの事前打合会（10/23） ■防災教育（Ⅲ）区役所との事前打ち合わせ会（10/24） ■緊急地震速報受信システム設置(10/27) ■防災通信発行(10/30) ■防災教育（Ⅲ）消防署との事前打合会（10/31）
11	■数学・数学A（1年） データの分析において過去のデータが蓄積され、未来予測等に利用されていることを知る ■家庭・家庭総合（1年） 食生活分野において、保存食、非常食・レトルト食品について学ぶ	■生徒防災委員会(11/13) ■防災教育Ⅲ（LHR）(11/16) 1年　防消火訓練 2年　避難所開設支援訓練 3年　HUG研修 ■東区民祭り参加（11/26）	■P1チャレンジモニターテスト(11/14) ■防災訓練・避難訓練Ⅲ(11/16) ■オープンスクール（防災教育）(11/16) ■第３回学校運営協議会(11/16) ■防災通信発行(11/8,11/14,11/20,11/24,11/27,11/28) ■防災道徳授業研究（静岡大学他訪問）(11/28-30)
12	■数学・数学Ⅲ（3年） 2次曲線において情報を得るためのパラボラアンテナなどに放物線が利用されていることを知る ■家庭・家庭総合（1年） 米の話α化米について学ぶ（非常食）	■防災マニュアル翻訳開始（国際コース）(12/2)	■防災教育小中高連携研究（北九州市教育委員会、東筑高校訪問）(12/5) ■第３回安全教育事業推進会議(12/12) ■第４回学校運営協議会(12/15) ■第3回防災主任研修(12/26)
1	■情報・社会と情報（1年） 情報システム・GISを使った震災被害の想定把握について学ぶ	■防災教育Ⅳ(1/23) ■生徒防災委員会(1/29)	■防災通信発行 (1/17) ■京都府議会学校訪問(1/24) ■宮城県教育委員会学校訪問(1/26)
2			■安全教育事業成果報告会(2/2) ■第５回学校運営協議会(2/8) ■校内安全点検(2/19) ■アクサユネスコ減災P報告会(2/23)
3	■理科地学（2年） 気象と災害について学ぶ ■家庭・家庭総合（1年） 住居分において間取り、耐震構造について学ぶ	■東日本大震災メモリアルday2017研修参加(3/3-4)	■防災通信発行(3/6)

別添資料2

東稜高校　防災教育（Ⅰ）～（Ⅳ）　指導計画

<table>
<tr><th></th><th>１年</th><th>２年</th><th>３年</th></tr>
<tr><td rowspan="2">防災教育
（Ⅰ）
7 月 6 日
（木）</td><td colspan="2">第１回　避難訓練</td><td rowspan="2">クロスロードゲーム
（実習）</td></tr>
<tr><td>防災の基礎知識と心構え（講義）</td><td>救急救命法と AED 操作（講義、実習）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">防災教育
（Ⅱ）
9 月 28 日
（木）</td><td colspan="3">第２回　避難訓練</td></tr>
<tr><td colspan="3">「魂の復興とこれからの災害への備え」
神戸学院大学　前林清和　教授　（講義）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">防災教育
（Ⅲ）
11 月　16 日（木）</td><td colspan="3">第３回　避難訓練</td></tr>
<tr><td>防消火訓練（実習）</td><td>避難所開設支援訓練
（実習）</td><td>ＨＵＧ（実習）</td></tr>
<tr><td>防災教育
（Ⅳ）
１月　　日
（　）</td><td colspan="2"></td><td>葛藤事例を用いた思考実験討論型防災倫理授業</td></tr>
</table>

別添資料３－１

小論文コンクール　背景・ねらい・結果

熊本地震から１年。被災に濃淡が職員にも生徒にもある状況で、防災意識に温度差が出てきているように感じる。また、今回の地震を感性で捉えるだけでなく、論理でもとらえることが必要ではないかと考えた。

さらに、進学校を標榜する本校は、新入試制度を目前にして、生徒の論理的思考能力の向上が喫緊の課題となっている。これから生徒が出ていく１０年後、２０年後の社会を考えれば、大きな変革の波が社会にうねり、これまでの経験など通用しない、そのような社会で生徒が生き抜くために必要なのは、日本人の精神と論理ではないかと考えられる。

このようなことから、今回の地震を不運で終わらせることなく、地震と正面から向き合い、当事者意識を持って災害への備えについて総括する切っ掛けを与えることが出来ればと考えた。逃げることなく正面から向き合い、考え抜くことで、文部科学省が指定校として本校に与えたテーマ「自助・共助のために主体的に行動する児童・生徒の育成」、また本校の掲げる「見えない学力の育成」に結びつけばと思う。

課題の設定に関しては、生徒のメンタル面を考慮して、Ａ，Ｂの２題とした。Ａでは心理的負担が大きい生徒にはＢを課題とした。

課題Ａでは、自分の事に執することなく、体験談に終始することなく、今回の体験から何を考え何を学んだか。日常の有り難さを訴えることに留まることなく、その先の議論の展開をすることが肝要であった。

人の力ではどうにもならない人智を越えた自然の力を認めながらも、非力な人間の中のすごさ、模範となるべき人々を見いだし、考えを見いだす力が大切であった。

他人事ではないといいながら、他人事のようにとらえている答案、学んだことをはっきりと論じられていない答案、内容はあるが形式を満たしていない答案など、踏み込みが浅い答案が多かったが、全体的には前向きな忍耐力を感じるトーンが目立ち成長と希望があった。

課題Ｂは、文部科学省の研究課題の一つである「国や関係機関及び各自治体が作成した各種資料等を参考にした防災教育の実施」のテーマの元に、総務省のデータを基にした、データ読み取り方の小論文として出題した。

データ読み取り方の小論文の命であるデータの読み取りは概ね出来ていたが、都合のいいデータのみに触れすべてのデータに触れていないものやデータ間の関連性の考察が甘いものが散見された。また当たり前のことを議論することに終始するものも多くあった。

今回の地震では、生活の基盤（経済）だけでなく、心の基盤（人間関係・コミュニティー）をも揺らした。郷土は傷ついた。しかしこれを機会に、郷土（共同体）の一員として、郷土を見つめ直し、郷土を愛する心を育みたい。現状回復を目指すだけでなくその先を見据えてほしいと思っている。今後生徒を待ち受けているものは、復興特需のあとに訪れるであろう熊本限定の不況、少子化と相まっての人口流失による地域活力の喪失、ＡＩの勃興による雇用環境の激変などが考えられる。「自律自興」「一点突破」の東魂を身につけた生徒が、これらの課題に勇猛果敢にチャレンジして、地域を支えてくれることを願うばかりである。

別添資料３－２

20171227
防災主任　竹中京一

２年生　防災をテーマにした小論文コンクール
審査結果

最優秀賞	２年１組２０号	吉田	慎司
優秀賞	２年２組１２号	福嶋	大悟
優秀賞	２年１組２８号	川村	愛
優秀賞	２年１組２５号	江﨑	あかり

時機をみて、表彰を行います。最優秀賞受賞者にはトロフィーと表彰状、優秀賞受賞者には、表彰状を授与します。

（評）

文科省のモデル事業の課題の中で「自治体発行の統計資料を用いた防災教育」と謳われていましたので、今回は総務省の複数のデーターを分析して地域防災を論じる資料分析型の小論文ともう一題は今回の震災から得た教訓を書くテーマ型の小論文の２題から１題を選択して解答するものとしました。３年生と同様に多くの生徒がテーマ型で書いてきていました。いずれも前向きな姿勢が読み取れる東稜生の素直さややさしさが表出されたものばかりでした。今後の指導しだいで大きく伸びる学年であると思われます。

小論文としては、この後の指導が大切であり、テーマ型は、書きやすい反面、論を深めるのが難しく、思考や吟味を徹底して論を深めるように指導する必要性があると思われます。

テーマ型は出題内容から小論文として論じにくい側面もあり、かつまだ２年生でもあることを考えると無理もないことかもしれません。

選考では、地震からあまり時間が経過していないにもかかわらず、恐れることなく正面切って震災と対峙し、体験をとおして自己の内面と向き合い、「よく生きる」ことを志向しているものを選出しました。語彙力、文書構成は大目に見ました。「素直さは知性」と言われますが「素直さは伸び代」でもあるといえると思います。従って今後の伸び代を期待して、素直で虚飾のないものを選びました。

書き方としては、教訓を対策にしてしまうと対策と課題についての内容となってしまいがちで、論の展開に詰まってしまう答案が多かったようです。学ぶべき教訓はより根源的なものとすべきで、生徒にはさらに深い思考力が求められます。

また論の出発点を「自然災害から学ぶべきこと」とした生徒は、日本では、予測不能で不可避の自然の猛威は避けることが出来るはずもなく、すべての日本人がこの前提の中で生きていることを確認して、災いをもたらすと同時に様々な恵みももたらしてきた日本の自然への感謝と畏敬の念､人智を越えたものの存在を潜在的に意識している証左でもある、日本人の謙虚さ、誠実さ、和を大切にする心を再認識して、これらの意識が薄れてきている原因を論じることになると思われます。世界屈指の経済力を背景に高度な科学技術に無批判に依存し、自然を過小評価しつつ、自然観を喪失し、慢心や過信がなかったか。個人偏重の傾向、理不尽の甘受、当事者意識の欠如から、ふるさとを守る気持ちなど、危機意識の低下の原因を、失って来たものの中に見いだすことになると思われます。

論の出発点を「震災の体験から学ぶべきこと」とした生徒は、日本人の存在の前提条件を謙虚に受容して、辛い体験を前向きにとらえて、自分の生き方や考え方を変えうる貴重な体験として、震災で活躍した尊敬すべき人間の姿の中に、自己犠牲、責任感、高い職業倫理、ヒューマニズムなどの、心の復興に活かすべきものを見いだし、今後の生き方、在り方や日常を問い直すことを論じることになります。逆に体験の中で、若い世代の活躍の一方で、立ち居振る舞いが残念な大人を反面教師として、「よく生きるとは何か」を考え、自分と向き合うことになるパターンもありえます。

いずれを出発点にした答案も、日本人の心の原点に迫るまで考察を深めるような答案になるように思考力、洞察力を高めてくれればと思います。例えば、なぜ日本人は共助に強いのか、なぜ日本人は自然を神として崇めてきた歴史を持つのか、なぜ日本人は自然に対する畏敬の念が深いのか、なぜ日本人は和を大切にするのか、利他の心、絆や無常観まで考えることが出来るように指導したい。

防災を目的とした防災教育が基本ではあるが、防災意識について検証することで、日常生活の意識改革に結びつき、生徒の主体変容が引き出せれば、今回の取組は成功と言えると思います。

別添資料４－１

20170807

防災担当

東稜高校　防災グッズ　アイデアコンテスト

１　提案理由

熊本地震を経験し、私たちは発災後、様々な不安や不便等を経験した。そのときの記憶が鮮明なうちに、その不安や不便を解消するためのアイディアを考え、防災意識を高めると共に、経験を活かし、次に備えることを目的とする。

２　主催

防災主任、生徒防災委員会

３　実施方法

別紙のプリントを各クラスに配付し､防災・減災のためのグッズのアイディアを募る。

８月中旬　　生徒防災委員会で、趣旨説明

８月下旬　　生徒防災委員による各クラス生徒への趣旨説明

コンテスト応募期間　８月２９日（火）～９月１２日（火）

９月中旬　　審査

副校長、防災主任、１，２年生防災委員で入賞作品候補を審査し、校長先生に順位付けをしていただき、決定する。

東稜高校長賞（最優秀賞）（１点)、優秀賞（２点)、優良賞（２点）

計５点。「該当なし」の場合もあり。

１０月上旬　審査結果発表、表彰

※１０月５日（木）中間考査後の集会で出来ればと考えております。

※防災グッズアイディアコンテストに関する防災通信を発行

４　必要な予算

表彰状代　１，０００円程度

賞品代　　３，０００円程度

別添資料４－２

防災・減災グッズ

アイディアコンテスト

東稜高校生徒防災委員会　　2017 年 8 月

あのときの想いを形に

このたび、東稜高校防災委員会では、下記の要領で、防災・減災グッズアイディアコンテストを実施することになりました。

地震直後、皆さんも不安な思いや不便なこともたくさんあったと思います。そんな不安や不便を解消するアイディアを、生徒の皆さんから募集します。「あのときこんなものがあれば」「あのときこんな思いをした」皆さんだから生み出せる商品があると思います。

あの時の皆さんの思いを形にして、これからの防災・減災に是非活かしてください。

応募期間

８月２９日（火）～９月１２日（火）１７：００までです。

応募方法

所定の用紙に、必要事項とともにアイデアを詳しく記入して、各クラスの防災委員に提出してください。

応募上の注意

これまでに発表されていないアイディアに限ります。グループでの応募（３名まで）でも構いません。

賞

東稜高校長賞（最優秀賞）　１点

優秀賞　２点

優良賞　２点

東稜高校　２０１６年５月

考えるヒント

考えるとは、

「類比」「対比」「因果」

の３つに集約されます。

共通点を探したり、比較して違いを探したり、因果関係を考える足がかりにすると良いでしょう。

別添資料４－３

20170921
防災係

２０１７　東稜高校　防災グッズ　アイディアコンテスト　審査結果

１　応募総数　７２

２　審査結果

学校長賞 最優秀賞	２年５組１９号　宮﨑　玲　　校長、副校長、教頭、主幹　　満票 浄傘（災害時傘で水をためて貯めた水を飲み水に浄化できる機能を持つ傘
優秀賞	３年国組２８号　直江　佳香　　校長、副校長、主幹　　３票 車中泊を快適にするシーツ。水に浮くため溺れている人の救命道具にもな また水を貯めることも出来る。
優良賞	２年５組３１号　田上　桜　　教頭、主幹　　２票 自家発電つき簡易流し。水を貯めることが出来て断水時もある程度使用でき また引き出しには、水回りの生活用品が備えるけられている。
優良賞	２年３組２２号　五十嵐　千紗　副校長、教頭　２票 カプセル入りコンパクト液体歯磨き。口に含むだけでカプセルが溶けて、 歯磨きをした状態になり、免疫力低下を防ぐ。
優良賞	２年３組３６号　西村　唯　　副校長　主幹　２票 スーツケース型簡易ベッド。広げると簡易ベッドになる。リクライニングも 出来て、要介護者の負担と避難所での介助を助ける
佳作	２年６組１１号　田上　竜誠 ２年理組４０号　山本　汐莉 ２年３組２１号　赤星　明佳 ２年３組３３号　高尾　みくり １年７組３３号　中原　璃良 １年７組　６号　高間　佳杜 １年７組１９号　村松　大地

【評】被災経験を活かしたより具体的アイディアグッズの提案が目立った。最優秀賞の作品は、自身の体験から人間の生命維持に必須である水の確保を主題としたアイディアグッズであり、秀作である。優秀賞は一つのものに多くの機能を盛り込み、様々なシーンで役立つように考え込まれた秀作であった。他にも良い作品が多く寄せられ、急遽佳作を設定し表彰の対象とした。被災の経験から具体的なものが多く素晴らしいが、今後は各自の進路希望分野に特化した、多少空想が入っても良いので、画期的提案も期待したい。例えば、電気を有線でなく無線で送ることが出来れば、すなわち電気を電波に乗せて送ることが出来れば、震災時の停電は受信機さえあれば解消されることになる。これは、石油資源の可採年限を伸ばすことにも繋がり未来の人たちにも貢献できる。宇宙空間には無尽蔵に太陽光が降り注いでおり、ソーラーパネルを搭載した人工衛星を打ち上げれば、宇宙空間から電気を電波に乗せて送れば、無尽蔵に電気が得られることになる。多少空想が過ぎる部分はあるが、現代のテクノロジーはつい１００年前までは空想の域にあった。画期的なアイディアを出し、進学先で研究開発する人材になってほしい。時代を作る人が出てくることも期待したい。社会の有為な形成者となるべく日々学問に打ち込んでほしい。（防災主任）

別添資料5－1

P1チャレンジDAY

熊日 2017.8.31 朝刊　新生面　より

2017.8.31

新生面

新聞社・肥之國日報の部長が熊本市の対応を聞いてぼそりとつぶやく。「よか口実ば思いついたばいね。市も、やるじゃなかや」。梶尾真治さんの小説「黄泉がえり」の一こま。続編を本紙夕刊で連載中だ▼作中では、1カ月後に大地震が起きるというわさが市民に広まる。単なるデマではなく、ほぼ確実な「予測」らしい。市長は対応を迫られるが、うわさを基に避難指示を出すわけにはいかない。かといって放置すれば、市全体がパニックに陥る。考え出したのが、当日大掛かりな「総合防災訓練」を実施する策だった。あくまでサイエンスフィクション（SF）の話である▼現実に戻れば、あすは「防災の日」。94年前に起きた関東大震災で10万5千人が死亡・行方不明となった。今後予想されるマグニチュード（M）7級の首都直下地震が起きれば最大で2万3千人の死者が出ると試算されている▼SFと違って地震の正確な発生日が分からない以上、できることはやはり「備え」しかない。備えには社会全体でやることと、個人でできることがある▼昨年の熊本地震の直後にはライフラインがストップし、飲み水やトイレに困った。しばらくペットボトル1本の水、おにぎり1個さえ、手に入れることができなかった▼500ミリリットルの空のペットボトルに、水道から水をくんでみた。これ1本で朝から顔を洗い、歯を磨き、飲み水とする。幸いにも日常生活の中で忘れかけている不自由さだが、それを思い出すことも一つの備えになるに違いない。

「P1チャレンジDAY」とは、ペットボトル1本分の水で、始業から終礼までの時間を過ごすことが出来るかに挑戦する企画です。トイレの流す水以外、歯磨き、手洗い、飲み水など生活に関わることを、ペットボトル1本分の水で賄ってみてください。

期　日　　月　　日　7:25～16:45

チャレンジルール

①トイレを流す水、掃除に使う水以外はすべて、ペットボトル1本で賄う
②途中で使い切ってしまった場合には、使い切ってしまった時刻をペットボトルにマジックで記入しておくこと
③ペットボトルの水が余った場合には、余った水の水面をマジックに記録しておくこと
④防災委員は、ペットボトルを回収し、記録する。

別添資料５－２

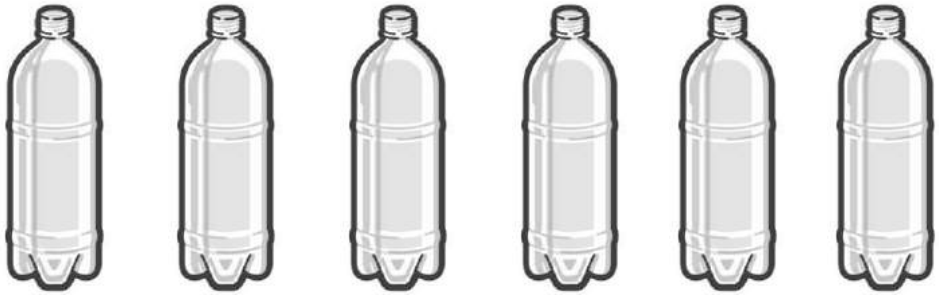
20171025
防災係

Ｐ１チャレンジ（モニター実施）報告書

先生

１　ペットボトルの減り具合の時間経過ををご記入ください。

スタート　３／４　１／２　１／３　１／４　empty



時　分　時　分　時　分　時　分　時　分　時　分

２　大凡の水の用途をお書きください。

飲み水　　％　手洗い　　％　歯磨き　　％　その他　　％

３　Ｐ１チャレンジ中の体調はいかがでしたか。健康上問題を感じることがあったらお書きください。

４　目的を達成するための方法として「Ｐ１チャレンジ」は有効と考えられますか。

５　４　３　２　１

有効　　無効

どちらとも言えない

目的：恵まれた日常生活の中で忘れかけている不自由さを認識する

５　生徒で実施することが出来ると判断されますか。実施できると判断された場合の改善点、工夫の余地についてお教えください。

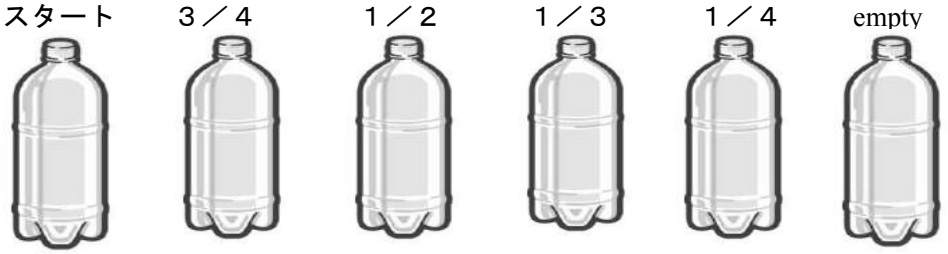
お忙しい中ご協力いただきありがとうございました。

別添資料５－３

20171117
防災係

Ｐ１チャレンジ　モニター実施報告

１　取組の様子
ペットボトル（500ml）の減り方について



モニター						
①	8：20	11：48	12：50	13：10	13：35	13：37
②	6：30	13：40	17：30	19：30	－	－
③	8：30	9：30	12：00		14：30	15：00
④	8：14	12：11	16：12		翌日 3：00	6：00
⑤	6：30	13：00	16：30	19：10	20：00	20：30
⑥	8：30	13：00	16：00	18：00	18：30	20：30

２　大凡の使い途（５）

	飲み水	手洗い	歯磨き	その他
①	７０	１５	１５	０
②	８０	２０	０	０
③	１０	９０	０	０
④	１００	０	０	０
⑤	８０	２０	０	０
⑥	３０	５０	２０	２０

３　P1 チャレンジ実施、健康上の問題点
・のどが渇き気味
・食事に水分があり良かったが、夏場は厳しい
・良好
・元々普段から水分を取らない方なので、体調に影響なし。夏場のスポーツ後などであればもう少し飲んでいたかもしれない。

４　目的を達成するための手段として有効か
有効　５　－　４　－　３　－　２　－　１　無効
3 名　　2 名　　1 名

５　実施は可能か。実施上の問題点は？
・トイレでの手洗いは水道でごく少量を使用し、その分はペットボトルから引けば良いと思われる（トイレの洗面台に名前入りのペットボトルを置くなどするなど工夫する。全員実施の場合厳しいが）とても良い体験になった。
・水分を取るのみであれば、冬場はこれで可能。しかし手洗いが徹底できないと感染症などが心配。
・自分の日常生活の中に、ある程度制限を加えることは、なかなか経験できないことであり、自分を律する良いトレーニングにもなる。実施可能と判断。
・季節柄、その日の体育の授業等（汗をかくかどうか）等を判断・考慮すれば十分実施可能。ただし、1 週間の期間内のどこかで希望者のみの実施が妥当と判断。
・今回のように空になる時間の記入であれば無理なく実施可能。手洗い歯磨き飲み水を同じ注ぎ口からと言うのは衛生上問題。紙コップの準備があれば良いと思われる。

提案
　目的を達成する手段としては、有効。工夫の余地はある。
実施ルールを
①使い切った時間を記入する方式
②冬場
③飲み水のみで使用
④希望者　　とする。

別添資料6

生徒会執行部に、生徒議会で規約改正の提案理由を説明するために、作成した資料になります。今後、生徒防災委員会が立ち上がり、活動をしていくこととなると思いますので、趣旨をご理解の上、ご協力をお願いいたします。

生徒会規約　改正趣意書

東稜高校
防災主任　竹中　京一

１．改正案
　生徒会組織の中に、新たに生徒防災委員会の設立を提案します。

２．提案の理由
　熊本地震から１年が経過しました。１４年後には、熊本地震後に生まれてきた生徒が本校に入学してくることになります。本校は震源地に近い学校です。本校は熊本地震の影響で、教育活動の中断を余儀なくされ、避難所にもなり、施設等にも大きな被害を受けました。この年は大変残念なことに体育大会も中止となりました。
　しかし、教育活動中断を余儀なくされていた期間に、在校生や卒業生がボランティアとして活動し、大きな支えとなってくれました。そのとき、私は、「高校生はもはや守られる立場だけではなく、守る立場でもある」ことを教えられました。また「何をしてもらうかではなく、高校生として何が出来るか」という発想を持ち、行動できる生徒たちを誇りに思いました。
　これらの活躍や体験等を風化させずに語り継ぐために、生徒会内に生徒防災委員会を新設し、防災に関する生徒会広報誌の発行や地震発生日には毎年生徒防災集会を行うなどして、生徒自らが学び、行う防災教育の永続的活動のシステムの構築を行いたく提案しました。
　また、思い出すことも辛い体験だが、熊本地震を語り継いでいくことは、地震を経験した私たち世代の義務であり、責任であると考えます。また地震に限らず、防災への意識を常に保つことが肝要と考えます。今後の災害に対しての防災、減災の礎となるのは人材であり、その核となる生徒防災委員会の設立を切にお願いするものです。

３．生徒防災委員会の活動内容（予定）
　（１）時間と予算が許せば、全国の同じ立場の防災委員との交流を行いたい。
　（２）生徒防災委員会を中心に熊本地震発生の４月１４日（前震）には、毎年生徒会主催の生徒防災集会を開催したい。
　（３）1月１７日と3月１１日には、防災をテーマとした生徒会広報新聞を発行したい。
　（４）防災に関する研修を受けて、文化祭で研修成果を発表する。
　（５）その他、防災・減災に関わる活動

４．その他
　本校は進学校であり、防災教育を通して、知識技能を身につけることは当然のこととして、思考力や判断力、また「何をしてもらうかではなく、何が出来るか」という発想を身につけてもらいたい。さらに防災教育を通して、興味・関心が高まり、将来生徒防災委員の中から、次に挙げるような進学先へ進学し、将来、日本の防災減災を担う人材が輩出されることを期待する。
・兵庫県立大学　グローバルリーダー養成コース　災害看護
　　減災復興政策研究科
・香川大学　ネクストプログラム　防災士養成プログラム
　　学校防災・危機管理マネージャー養成コース
　　行政・企業・医療防災・危機管理マネージャー養成コース
・北九州市立大学　地域創生学群
・熊本県立大学　総合管理学部
・宮崎大学　地域資源創成学部
・日本大学　危機管理学部
・宇都宮大学　地域デザイン科学部
・愛媛大学　社会共創学部
・福井大学　国際地域学部
・高知大学　地域協働学部

別添資料7

学校評価アンケートより（防災関係）
よく当てはまる－当てはまる－当てはまらない－全く当てはまらない

3者間比較

防災教育に対する満足度

	4	3	2	1		2.5
生徒	56	40	3	1	#	3.51
職員	28	54	18	0	#	3.1
保護者	37	56	6	1	#	3.29

ボランティアに対する満足度

	4	3	2	1		
生徒	10	21	43	26	#	2.15
職員	4	70	20	6	#	2.72
保護者	10	49	34	7	#	2.62

防災教育に対する満足度 累積

	4	3	2	1		2.5
生徒	56	96	99	100	#	3.51
職員	28	82	100	0	#	3.1
保護者	37	93	99	100	#	3.29

ボランティアに対する満足度　累積

	4	3	2	1		
生徒	10	31	74	100	#	2.15
職員	4	74	94	100	#	2.72
保護者	10	59	93	100	#	2.62

過年度比較

防災教育に対する満足度

	4	3	2	1		
h27	28	58	14	1		3.13
h28	40	52	7	1		3.31
h29	45	52	3	0		3.41

ボランティアに対する満足度

	4	3	2	1		
生徒	10	23	38	29		2.13
職員	9	21	41	29		2.1
保護者	10	21	43	26		2.15

東稜高校防災通信（１学年）　　平成２９年１１月２９日（水）

別添資料８

自興

「助けられる立場から誰かを守る立場へ」

11 月 16 日（木）第７時限目、防災・避難訓練が実施され、学年ごとに様々な取組が行われました。

１学年の取り組み
（１）学年主任・木田先生からの講評
（２）熊本市東消防署詫間出張所　井芹様（本校２５期生）による講話
（３）水消火器を用いた防消火訓練
（４）熊本市東消防署詫間出張所所長　楢崎様による講評
（５）生徒副会長渡邊さんによる謝辞

■ 消火器について

本校卒業生の井芹様より、消火器に関するお話を伺うことができました。

【消火器の種類】
①圧力計がついているもの→放出量を調整できる。
②圧力計がついていないもの→放出量を調整できない。（全部粉がでてしまう）
※いずれの消火器も必ず一度で使い切るようにしましょう。

【消火器を使用する火災の種類】　消火器を使用する火災の ABC について教えていただきました。
A 火災（普通火災）近くにある物が燃えている場合
B 火災（油火災）　キッチン等で油が原因で火災が発生している場合
C 火災（電気火災）コンセントなどからの発火が原因で火災が発生している場合

消火器はあくまでも**初期消火用**の道具です。自分の背丈より高い炎や炎の量が多い場合は迅速に１１９**番通報し、逃げる**こと！

【消火器の使用手順】３つの STEP を覚えましょう！
STEP1 黄色いピンを抜く STEP2 ホースをぬく STEP3 レバーを握る
※消火のポイントは５m 離れたところから箒をはくように火の根本を狙うことだそうです。

実際の消火訓練の様子（水消火器を使用しています。）
消火器で火元を想定したコーンを狙います。各クラスの体育委員と希望者が挑戦しました。初めて使用する人も何度か訓練したことのある人もいたようです。「練習とわかっていても緊張した。実際に炎を目の当たりにすると、手が震えてしまうかもしれない。」との感想もありました。

■ 防災クイズ

楢崎様より出題された防災に関するクイズをご紹介します！正しい防災知識を蓄えて災害時に備えましょう。※答えは右下

Q１　地震発生時、エレベーター内にいた。その場で救助を待つか？　【O or ×】
Q２　地震発生時、屋外にいた。急いで避難するならどこか？　【A 交番　B ガソリンスタンド　C コンビニ】
Q３　地震速報が鳴ったら屋外、J アラートがなったら屋内に避難する。　【O or ×】
Q４　足が重い物の下敷きになっている人をそのままにして救助隊をその場で待った。　【O or ×】
Q５　避難する際、遅いペースに合わせるため高齢者・子どもを先頭に置いて避難した。　【O or ×】

■ １学年の感想

●防災避難訓練について

・火元となるパソコン室から避難した。訓練には緊張感をもって臨むことができたが、実際に災害が起こった場合今回のように迅速に避難できるか不安である。
・体育の授業が行われていたためグラウンドにおり、全クラスが避難してくる様子を見ることができた。ほとんどの人は真剣に取り組んでいたが、私語をしている人もいて、残念に感じた。
・消防署の方が○×クイズ等を交えながらわかりやすく説明して下さったので火災に関する知識や災害時にとるべき具体的な行動が頭に残った。
・東稜高校は廊下がなく開かれた構造になっているので比較的逃げやすいと感じた。また、実際はもっとお互いに声をかけあって避難するべきだと思う。

●災害時に備えた家庭での主な取り組み

熊本地震以降、様々な地震対策を行うご家庭が増加しているようです。
・災害に備えた持ち出し用リュックや袋を玄関先や枕元に置いている。
・災害時に避難する場所や危険な場所を実際に家族で見に行った。
・家族が別々の場所で災害に遭った際、携帯電話が使えない可能性があるため、集まる場所（祖母の家や避難所等）や安否確認の方法を決めている。
・携帯電話に家族全員が GPS アプリを入れている。
・震災の恐ろしさを風化させないようニュースやテレビ番組での特集を家族で視聴するようにしている。

特に何も話していないので自分から話題を出そうと思うようになったという意見も挙げられました。

防災リュックの中身（例）
非常食（カップ麺・冷食・チョコレート・缶詰など）・ヘルメット・水・懐中電灯・防寒グッズ・乾電池・ラジオ・マッチ
等の準備・買い足しを行っているご家庭が多いようです。

●災害時に高校生としてできる地域貢献

体力・気力ともに充実している年代なので積極的にボランティア活動に取り組みたいといった意見が多数を占めていました。
・清掃活動・瓦礫の撤去・募金活動・炊き出し・配給の手伝い・水汲み・力仕事・避難所での心のケア・仮設テントの設置などのボランティア活動に取り組む。
・普段から地域の方々との交流を大切にする。いざという時、不明者の把握や避難の呼びかけなどに役立てることができると思う。
・SNS での呼びかけと情報収集。正しい情報を見極めることが必要。
・高校生という立場を忘れず、必ず地域の大人の方の指示に従う。自分勝手な判断をしない。
・防災委員での活動を活かして防災マップ作成に取り組む。（公民館などに掲示）
・東稜高校の生徒であるからこそ東稜高校でボランティア活動に取り組む。学校の構造やトイレ・プールの位置などを把握している自分たちは貴重な存在だと考える。

●東稜高校での防災教育を通して学んだこと

「非日常は日常が試される。」という言葉に影響を受けた意見が多く挙がりました。
・日常生活を丁寧に生きたい。当たり前のことであるが、普段から周囲に迷惑をかけるようなことをしない。
・最悪の状況を考えて行動しようと思った。地震は予測不能なため、常に警戒心をもっておきたい。
・訓練を疎かにしない。高校の訓練は中学時よりリアリティーがあるように感じる。
・熊本地震の際，東稜高校がとても活躍していたことを知った。
・防災マップの制作を通して普段通学路を通る際に危険な場所かどうか気にするようになった。
・熊本地震の恐怖を思い出した。冷静さが身についたように思う。
・間違いなく防災に関する意識は高くなり、知識も身についている。

１学年の生徒の中には**「中学生のとき熊本地震を体験し、高校生のボランティアの方に助けられた、高校生になった今、一人の大人として助けられる立場から自分や周囲の人を守る立場になりたい。」**という意見が挙がっており、**自助・共助・公助の意識**が高まっているように感じました。

みなさんは充実した防災教育を受けることができる環境にいます。今後も使命感をもちつつ、あらゆる観点から防災について考えていきましょう。そして、自分の命・大切な人の命を守ることのできる強さを身につけていきましょう。

防災クイズの答え
Q１　×　エレベーターのボタンを全部押すと最寄りの階にて扉が開きます。（停電時は除く）
Q２　B　ガソリンスタンドは元々危険物を取り扱う場所なので頑丈に設計されています。
Q３　O　災害の種類によって対応が違います。臨機応変に判断してください。
Q４　×　身体は圧迫されると体内に毒素が発生し、突然重い物を取り除くことで毒素が体内を循環してしまいます。（クラッシュシンドローム現象）
要救助者を発見した際は１１９番通報をして救助を待ってください。
Q５　×　高齢者、子どもはできるだけ列の真ん中に挟むように避難して下さい。その際、先頭の人が長い棒のようなものにつかまりながら縦一列で避難することが望ましいです。

東稜高校防災通信（２学年）

自興

平成２９年１２月６日（水）発行

１１月１６日（木）防災教育（Ⅲ）

２学年避難所設営訓練

テント設営訓練

屋内に避難できず、雨よけや日よけ、けが人などに対応をするためにテントが必要となります。高校生の若い力を合わせれば、テントはすぐに立てることができます。代表生徒１０名で、２分ほどで立てることができました。

アルファ米炊き出し訓練

アルファ米についての知識と作り方を学びました。５０人分のアルファ米セットには具材・箸・容器・しゃもじなどが入っていました。具材とお米をよく混ぜて、８リットルのお湯を入れれば１５分ほどで完成です。「とてもおいしい」という感想でした。

簡易ベッド作成訓練

身近にある段ボールとガムテープだけで、簡易ベッドを作りました。数人で協力すれば、５分程度で完成です。寝心地もよく、災害時には、高齢者やけが人・妊婦さんなどのために作ってあげたいという感想を書いた人が、多数いました。工夫をすれば仕切りにもなります。

地域の方・講師の方からの挨拶

◎熊本市東区長　田端高志　様

「東稜生が、このような訓練を受けていることを見て、とても心強く思いました。区長としても、君たちを頼りにしています。」

◎山ノ内校区自治協議会会長　石黒義也　様

「災害時には、東稜高校がこの地域の中核的な避難所になります。日頃からの、地域とのつながりを大切にしていきましょう。」

◎東区役所　漆野和也　様（今回の訓練のメイン講師として指導していただいた消防士の方）

「自分の命を守ることはもちろん、大事な人・大切な人・愛する人を守る気持ちを持って、日頃から備え、そして行動してください。」

アンケート結果

①防災について、家庭ではどのようなことを準備していますか？

１位：避難場所（集合場所）を決めている	１１９人	６位：あまりしていない	２９人
２位：非常食を準備している	１１５人	７位：家具転倒防止	２６人
３位：水を準備している	７６人	８位：避難経路の確認	１２人
４位：防災リュックを準備している	６０人	９位：荷物を高い所に置かない	１０人
５位：懐中電灯を複数準備している	３５人	１０位：大事な物をまとめている	７人

防災意識が高い家庭が多いようです。あまり備えをしていないと言う人も、今回の訓練を受けて、準備しようと思ったと答えています。

②高校生として、災害時にどのような形で地域に貢献できると思いますか？

１位：ボランティア活動	９７人	６位：避難誘導	２９人
２位：力仕事・支援物資の運搬・配給	９３人	６位：簡易ベッド作成	２９人
３位：高齢者・身障者のサポート	７３人	６位：会話・声かけ	２９人
４位：食事準備・炊き出し	５０人	９位：テント設営	２８人
５位：子供たちのお世話・遊び相手	３４人	１０位：今日学習したことを活かしたい	１９人

「高校生としての若い力を活かして力仕事をしたい」という回答や、「高齢者・身障者・子供たちのサポート・会話・声かけ」といった、人と関わることで貢献したいという回答が目立ちました。今回の訓練で学習したことを活かしたい・食事準備・簡易ベッド作成・テント設営という回答は合計１２６人であり、今回の訓練を実施した意義は、とても大きかったようです。

③これまでに東稜高校で行ってきた防災教育で学んだこと、考えたことを書いてください。

１位：避難方法（押さない、慌てない、しゃべらない、避難経路の確認）	９２人
２位：備えの大切さ	７０人
３位：高校生は助けられる側から、助ける側にならなければいけないということ	５０人
４位：防災対策についての正しい知識	２４人
５位：災害時や備えるときの協力する姿勢・コミュニケーションの大切さ	２３人
６位：防災意識の向上	２２人
７位：命の守り方（自分の命は、自分で守る）	１６人
７位：自分のことだけでなく、周囲の人のことを考えて行動することの大切さ	１６人
９位：地域とのつながり・地域貢献の大切さ	１５人
１０位：高校生は自分から主体的に行動するべきだということ	１４人

生徒の感想で多数みられた言葉

「高校生は助けられる側ではなく、助ける側の存在にならなければいけない」

「憂いがあるから、備えが必要」「非日常では、日常が試される」

「今回の訓練をしたことを活かして、非常時に人の役に立てる人間になりたい」

「学ぶことが備えになり、いざという時に役に立つので、今後も防災について学び続けたい」

まとめ

今年度、君たちは様々な防災教育を受けてきました。知識を得るだけでなく、今回のような訓練で実践的な力も身に付け、防災意識を高めてきました。そして、その知識や実践力を活かすための心も育ってきたと思います。常時はもちろん、非常時こそ、国家社会に貢献できる有為な形成者と成るために、心身を鍛え、節度を重んじ、知能を磨き、徳性を涵養し、将来に備えてください。（文責:２学年主任）

防災通信 自興（3学年通信）

4.29、12.6(水)

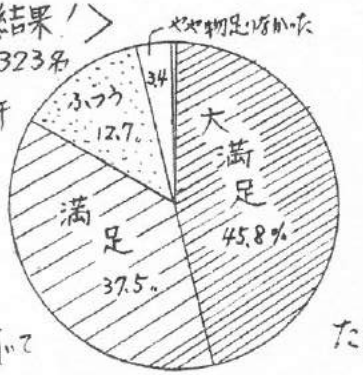
防災訓練終わる！

今年度から本校では「防災教育」を本格的に取り入れることになった。例年と違い避難訓練と消火器の実地訓練に加えて、学年別に避難所の設営や、簡易ベッドの製作、非常食の試食、提供の仕方などに取り組んだ。3年生は、避難所での避難者の受け入れ体制についての実地訓練を、HUG（避難所運営ゲーム）という形式で行った。予め事前指導を受けた各クラスの防災委員を中心に取り組んだ。初めはぎこちない動きだったものの、次第に要領を得てスムーズな動きを見せていた。最後の講評の中で防災士の阪本氏の「備え有れば憂いなし」でなく「憂いないよう備えよ」の言葉に納得した。

＜アンケート集約結果！＞

回答数323名

今回の防災研修に



◇今回の講演を聞いて

① 防災意識が	大いに高まった 63.8%	高まった 29.1%	ふつう 6.8%	
② 防災と日常生活には密接な関係が	大いにある 64.1%	ある 29.7%	ふつう 5.9%	
③ 防災に関する知識が増えた	大いに増えた 54.2%	増えた 35.0%	ふつう 10.5%	
④ 災害を自分のこととして考えることが	大いに出来た 63.2%	出来た 30.6%	ふつう 5.0%	
⑤ 防災教育の必要性を感じた	大いに感じた 67.5%	感じた 25.4%	ふつう 5.0%	余り 1.5
⑥ 今回の研修は有意義だった	大いに有意義だった 56.0%	有意義だった 30.7%	ふつう 10.2%	余り 2.5

（階段を下りグラウンドへ急ぐ）

（防災士：阪本氏の説明を受ける）

（広用紙に配置図を設ける）

（避難者をカードに見たてて配置を考えた）

参加者の声より

今回の研修を通して、私は、改めて自然災害に対して備えることの大切さを感じました。今回初めて知りました HUGというゲームは、避難所での適切な対応のしかたをシミュレーションするものでした。ペットとつれている家族や、病気に悩んでいる方などをどうすればよいのか、真剣に話し合うことができたと思います。話しの中で出た「憂いがあるから備えよ」ではなくて、ほんとにその通りだと思います。次なにが起きるかわからないけど日頃から備え、被害を最小限にくい止めようと思いました。

今回はクラスでみんなとやる防災教育でした。私は「Hug」というゲームを聞いたことはなかったのでどのようなものかと思いましたが、自分たちで避難所の設計を行ったりするゲームだったので、今後、再び自分たちの身に地震がおそってきたりしたときに出来ることを、しなければいけないことがはっきりしたなと思いました。避難所にくる人はいろんな家の崩壊であいやペットがいたり、ケガ人がいたりと様々な問題をかかえてやってくる人がいます。全ての人の要望に出来るだけ答えたり、1つ1つのことに対してしっかりとりくんでいくことが大切だなと思いました。もうすぐ自分は高校を卒業するので「1人の人間として災害時には率先して行動したり、頑張っていきたいなと思いました。

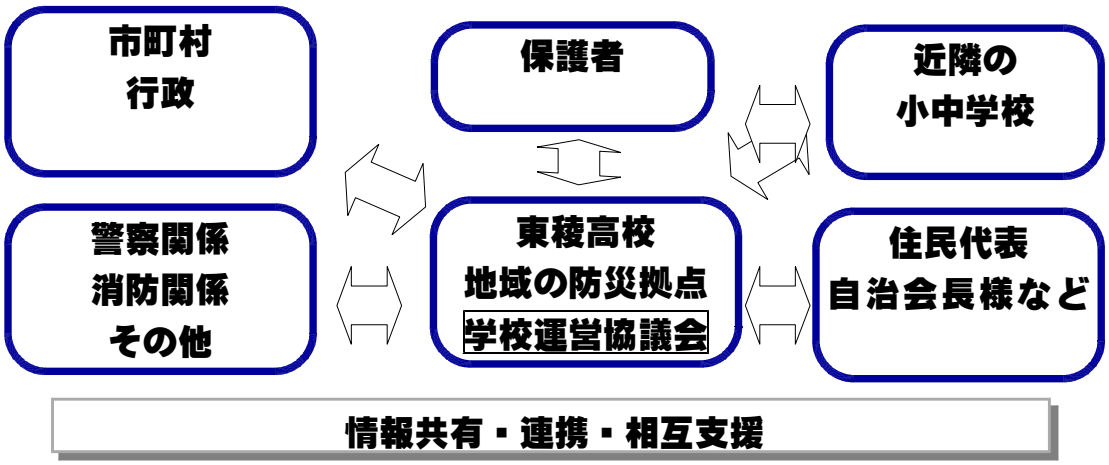
今回の研修で、実際災害が起きた時、自分はどのように行動すればよいのか、そして、避難してきた人達にどのように接し、指示をすればよいのかを多く学ぶことができました。
特に印象に残ったのは、避難所の設営や運営をHUGでみんなで考えたことです。来た人から入れればいいと思っていたのですが、やはり一人一人が何らかの事情があるということや他の人への配慮を考えるとても難かしかったです。しかし今回のHUGの取り組みをしたことで、対応の仕方や防災への意識を高めることが出来ました。
今回学んだことを、災害時に生かし、避難された人達が、少しでも安心できるようにしたいです。

別添資料11
20170424

学校運営協議会（コミュニティースクール）について
熊本県立東稜高等学校

先の熊本地震では、避難所に指定されていない学校にも多くの避難者が来られ、学校と地域の関係が希薄な学校では、住民自治に夜避難所運営への移行に時間を要した学校があった。また教職員も学校運営に関わり、事前の役割の確認や分担が出来ていなかったり、設備や備品の不足も見受けられました。このような様々な課題を解決するために、防災型のコミュニティースクールとして、学校運営協議会を核として、地域と一体となった災害時の連携体制や防災システムの構築を目指すものです。

１．学校運営協議会の設置の目的
　災害時の地域との連携を考慮した防災マニュアルの作成と協力体制の構築
２．具体的に検討していただきたい内容
　①学校を避難所として活用する際のマニュアル作成と情報の共有
　②防災教育手法の開発（地域と共同の実践的防災訓練の実施を含む）
　③災害時の学習支援体制の構築
　④その他
３．コミュニティースクールの構成イメージ



４．学校運営協議会委員の構成とお願いしたい役割(案)
・市町村行政関係者
　避難所運営に関する連携窓口、ボランティアに関する情報提供
・住民代表
　避難所でのまとめ役
・保護者代表
　学校職員との連携体制、災害時の連絡体制の構築、災害時の学習支援体制
・近隣の小・中学校関係者
　避難所設置を想定した連絡体制
・警察関係、消防関係
　災害時の避難等に関する連携体制

５．学校運営協議委員会の実施計画(案)

実施予定時期	学校運営協議会	備考
４月		
５月		
６月	第１回学校運営協議会 （運営方針、役割分担、計画方針の決定）	
７月		
８月	第２回学校運営協議会 （防災マニュアル、合同防災訓練計画検討）	
９月		
１０月		
１１月	第３回学校運営協議会 （合同防災訓練）	
１２月	第４回学校運営協議会 （合同防災訓練反省、防災マニュアルの検討）	
１月		
２月	第５回学校運営協議会 （取り組みの総括、次年度への課題の洗い出し）	
３月		

東稜高校防災通信

別添資料12

平成２９年６月２０日（火）

自興

東稜高校生徒防災委員会

「心の力を大切に」

ジャズトランペット奏者　大野　俊三氏　演奏講演から

平成 29 年 6 月 16 日（金）１５：１０から本校体育館で、世界的ジャズトランペット奏者の大野俊三さんの講演会が行われました。大野俊三さんは、1949 年生まれで岐阜県の出身。1974 年にジャズの巨匠アート・ブレイキー氏の誘いで渡米。演奏家、作曲家として活躍をされています。また 1984 年、1988 年の 2 度にわたり、アメリカで最も権威のある音楽賞の一つであるグラミー賞を受賞されています。

受賞後、交通事故やがんなどトランペッターとしては致命的な傷を負いながらも不屈の精神力で克服。演奏活動を再開されるまでに回復されています。

2013 年には世界最大級の国際作曲コンペティションにおいて世界 120 カ国、約 2 万人の中から、日本人で初めて、グランプリに輝かれています。

大野さんは、東日本大震災発生以来、今日までの間、来日の度に被災地の小中高等学校や避難所、仮設住宅などを慰問し、演奏を行われています。

熊本地震発生後は、熊本にも足を運ばれ、昨年秋には、熊本市の中学校で、復興支援のジャズコンサートを開かれています。そして今回の来日においても「被災した高校生のために演奏したい」との想いから、東稜高校での講演、演奏となりました。

講演の中で、「オーバー・ザ・レインボウ」「天空の城ラピュタのテーマ」「翼をください」「聖者の行進」の 4 曲を演奏されました。心を動かされる演奏で、会場には拍手が鳴り響きました。

また、生徒に向けて、「虹は希望の象徴。オーバーザレインボウを演奏したが、雨が降らないと虹は出ない。人生も土砂降りの時がある。」「人生は順風満帆な時だけではないではない。負けたときにどうするかが大切。勝ったときにそれが次の負ける原因となることもある。勝ち負けを人生にどう活かしていくか考えてほしい。」また「自分も事故でトランペットを諦めろと医者に言われた。人に言われて諦めるぐらいならやめた方がいい。心の力を大切にしてほしい。自分が諦めなければ、周りも必ずサポートしてくれる人がいる。常にポジティブに前に進む気持ちがあると必ず応援してくれる人が出てくる。またトランペットの演奏力の前に人間として尊敬されるかどうかが大切。心をしっかり持ってほしい。」「昨日の自分より今日の自分、今日の自分より明日の自分。他人と自分を比べることなく、自分の良さを認めて、自分の咲かせるべき花を咲かせてほしい。」「今を大切にすること。今をどう生きるか。努力次第で自分は変わる」と力強い言葉をいただきました。

生徒にも感想を聞いてみましたが「何事も諦めなければ素晴らしいことが待っているのだと思った。絶望的な状況から這い上がる精神力や根性をお持ちの方で、すごくかっこよかった。私もそのような人になりたい。」というものでした。

前向きになることが出来る、演奏に感動できる素晴らしい講演をしていただいた大野さんに心より感謝します。

東稜高校防災通信

白興

東稜高校生徒防災委員会

受信型から発信型へ ～生徒間交流を通して学んだこと～

京都府立東稜高校訪問報告生徒会長　三森菜月

９月１５日に京都府立東稜高校を訪問しました。京都府立東稜高校さんとは、校名が同じということから、熊本地震の際に、支援を受けたことが切っ掛けで交流が始まりました。今年も７月２６日に本校に来られ、学校紹介や案内、意見交換などの交流をしました。

東稜高校に到着すると、校門で先生方が笑顔で迎えてくださり一気に緊張がほぐれました。それから部屋に案内されると、京都東稜高校の文化祭で展示されたという、本校との生徒間交流の様子を写した写真などを見せていただきました。熊本と京都はとても離れていますが「心でつながっているんだな」と感動しました。

それから中庭に案内されました。すると全校生徒の皆さんが休み時間にベランダに出てきて歓迎してくださいました。さらに吹奏楽部の演奏や、野球部のエールなどとても感動しました。今回また、義援金をいただきました。防災・減災や復興のために大切に使いたいと思います。

その後別の部屋に移動し、意見交換などを行いました。はじめに本校が事前に用意していた質問に丁寧に答えていただきました。それに加えて京都東稜高校の教育システムや取り組みについてもパワーポイントを使いわかりやすく、説明していただきました。京都東稜高校には１年次はアカデミーコース・キャリアコース・総合コースの三つのコースがあります。２年生になるとキャリアコースは、ライフスポーツ・ライフサポートに分かれます。そこに来年から導入されるのが、ライフマネジメントです。ライフマネジメントでは想定外の困難や既存概念では対応できない問題を自分たちの力で解決する力を身につけます。また、環境（持続可能な社会づくり）・公共（安全・安心な社会づくり）・防災（リスクマネジメント）の３つのテーマを掲げ社会貢献できる人材育成をしています。具体的な活動としては、地区の避難訓練参加など地域と協力してボランティアを行ったり地域防災マップを作ったりしています。

その後、京都東稜高校さんが地域の人を集めて行ったという避難所運営ゲームHUGを行いました。実際に、避難所の運営をする側の気持ちになって取り組みましたがとても難しかったです。

京都東稜高校を訪問して学んだことはたくさんありましたが、やはり京都と東北また熊本では被災の様子やその影響は異なります。やはり自分たちの防災、東稜高校の防災、熊本としての防災を作り上げ、防災を教わる側から、情報を発信する側、つまり受け身から主体的になることが大切だと思いました。

東稜高校防災通信

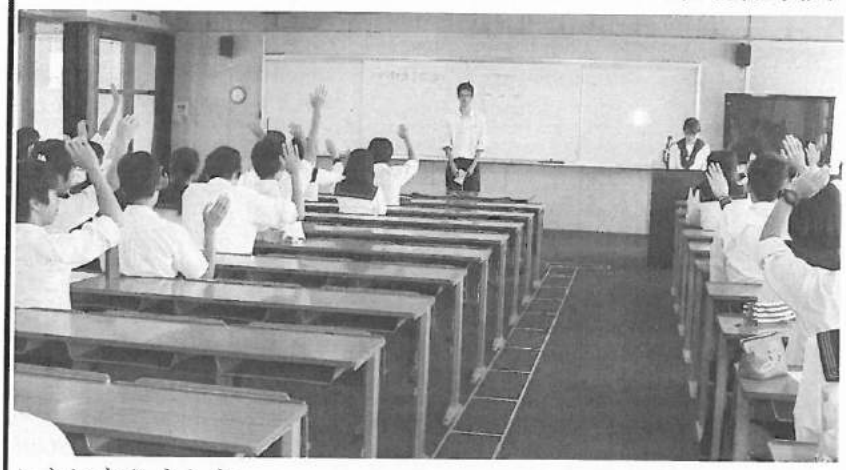
２０１７年７月３日（月）

自興

東稜高校生徒防災委員会

「東稜高校が地域の頼りとなるために」

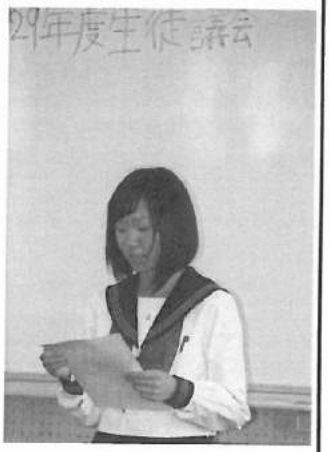
東稜高校生徒会に生徒防災委員会発足



去る５月２６日（金）１６：００から、ＬＬ教室において、生徒防災委員会の設立のための会則の改正を議題として生徒議会が開かれました。

松井会長の開会挨拶のあと、姥嶽副会長から提案理由の説明があり、審議の上採決があり、改正案が賛成多数で可決されました。

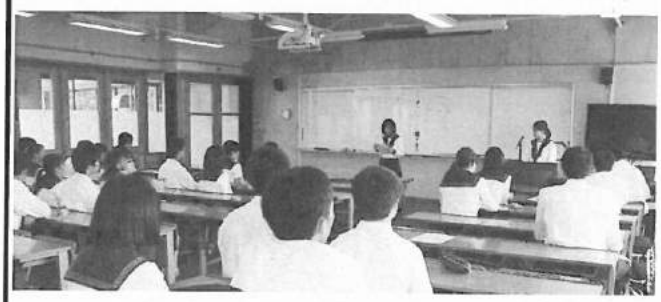
今年度は、既に各クラスの役員が決定しているため、代議員（学級委員長）が防災委員を兼務し、生徒防災委員会を構成することになりました。



熊本地震から１年が経過しましたが、14 年後には、熊本地震後に生まれてきた生徒が本校に入学してくることになります。震源地に近い本校は熊本地震の影響で、教育活動の中断を余儀なくされ、避難所にもなり、施設等にも大きな被害を受け、体育大会も中止となりました。

しかし、教育活動中断を余儀なくされていた期間に、在校生や卒業生がボランティアとして活動し、地域の大きな支えとなってくれました。彼らは「高校生はもはや守られる立場だけではなく、守る立場でもある」ことを教えてくれました。

これらの活躍や体験等を風化させずに語り継ぐために、生徒会内に生徒防災委員会を新設しました。防災に関する通信の発行や地震発生日には毎年生徒防災集会を行うなどして、生徒自らが学び、行う防災教育の永続的活動のシステムの構築を目指します。



また、思い出すことも辛い体験ですが、熊本地震を語り継いでいくことは、地震を経験した私たち世代の義務であり、責任であると考えます。また地震に限らず、防災への意識を常に保つことが大切だと考えます。今後の災害に対しての防災、減災の礎となるのは人材です。７月６日（木）には、防災教育のＬＨＲを行います。東稜高校が、私たち一人一人が、地域の頼りとなるように、技能を身につけ、心を磨いて生きましょう。

東稜高校防災通信

自興

東稜高校生徒防災委員会

未曽有の災害や惨禍を不屈の精神で乗り越えて　最前線の現場から

福島医科大学　入学式式辞より

（前略）ご存知のように、2011年（平成23年）の東日本大震災、原発事故以降、本学は、他の医学部や医科大学の使命である「教育」「研究」「診療」に加え、新たな歴史的使命を負うことになりました。それは将来にわたり継続して県民の健康を見守ること、そして、この災害とその対応のすべてを記録し、学び、次の世代へ伝えていくことです。すなわち、本学は、不安を抱える県民・国民を支え、この災害と惨禍に対して最前線に立ち続けることを運命づけられた大学と言えるでしょう。

今、私たちが直面しているこの試練は、「過去に例がない」とよく表現されます。しかし、福島の地は過去にも未曽有（みぞう）の災害や惨禍を不屈の精神で乗り越えてきた歴史があります。さきほども述べましたが、戊辰戦争の戦火の中、傷ついた兵士の治療にあたった医療者たちが、国内でもいち早く、この地に西洋近代医学を導入しました。当時の医術教育機関であった須賀川医学校が本学の前身となったのです。そして、そこで学んだ第1期生のなかには、関東大震災後、壊滅した街の復興を推（お）し進め、現在の東京の礎（いしずえ）を作った復興院総裁　後藤新平（ごとう・しんぺい）がいます。さらに1888年（明治21年）の磐梯山大噴火という自然災害に対しても、創立当時の日本赤十字社、いわゆる日赤と福島の医療者は、協同で敢然と復興に立ち向かいました。

本学の先達（せんだつ）は、壮絶な歴史の中で、当時の先端医療を駆使し、災害救護にあたり、街の復興に力を尽くしてきた経験を持っていました。激動の世相の中でも医療の充実と発展に貢献し、優れた医療人の育成、医学の進歩・発展に努めてきたのです。

このように福島と本学の歴史を振り返るとき、本学の先達が目の前の状況を的確に把握し、いかなる過酷な状況に対しても決して折れることのない「しなやかさ」をもって対応していたことが分かります。そうすることで医療者としての知識を得、思考を深めると同時に、人間としての幅を広げていったのです。
そして、このことこそ、私たち福島県立医科大学が、世界に誇れる先達から受け継がれてきたDNA、すなわち「resilience（レジリエンス）」（※）です。困難な状況にしなやかに適応して未来を切り開く力です。

レジリエンスの根幹は「しなやかさ」です。これから皆さんは、この学び舎（まなびや）で、それぞれの分野でプロフェッショナルになるための厳しい修業に入ります。君たちを温かく指導してくれる先輩から常に言われる言葉があります。それは、「修行とは矛盾に耐えること」です。そして、医療は、まさにその最前線です。

皆さんが医療の現場で向かい合う相手は、その方になんの落ち度もないのに、病（やまい）に苦悩している人たちばかりです。我々医療者は当然、全力を尽くして診療にあたります。しかし、病める方々は、直接の担当者である我々に、様々な不平・不満をぶつけてきます。なぜなら我々しかいないのです。

理不尽に感じるかもしれませんが、これが現実です。この不条理と矛盾に満ちている現場において、知識や技術の習得は、医療者の最低限の条件でしかありません。人を思いやる心に満ち、かつ信頼されるだけの良識や人間的な力が必須となります。

この不条理と矛盾に満ちている医療の現場でプロを目指す皆さんは、何度も失敗や挫折を経験するでしょう。しかし、精神科医の齋藤茂太（さいとう・しげた）先生曰く「人生に失敗がなければ、人生を失敗します」。これらの試練を、鍛錬の機会ととらえ、本学のDNAである不屈のレジリエンスの精神で、しなやかに対応してください。

先月、震災直後に、本学に入学してきた110名以上の方が卒業しました。すなわち、震災後満6年が経過したのです。この間、県や国の支援の下（もと）、本学には多くの施設や優秀な人材が集う組織が整えられました。震災前の教職員は約1,900名でしたが、現在3,000名を超えました。誰もが高い志を抱いて、この復興の最前線の医大へ結集しました。これは、本学が様々な面において、「可能性の塊」となったといっても過言ではありません。整備されたこれらの施設や組織を駆使し、最大の成果をあげることを目標とし、我々は、新たな未来の開拓に、不屈の精神でチャレンジする次のステージに入ります。

皆さんも、志をもって福島へ集まっていただきました。医大の誇るレジリエンスを武器に、その志を実現してください。君たちは我々の希望です。夢や希望を実現しその実績を持って、県や国はもとより、世界でも活躍してください。

これが、「福島県立医科大学で学ぶ者、一人ひとりの使命と心得ること」を伝え、入学式式辞と致します。
諸君の健闘を祈ります。　　平成29年 4月 5日　　福島県立医科大学　学長　　竹之下　誠一

東稜高校防災通信

自興

東稜高校生徒防災委員会

防災教育（Ⅱ）　講演会録　要約
「魂の復興とこれからの災害の備え」
神戸学院大学現代社会学部社会災害学科　教授　前林　清和先生

□私も阪神淡路大震災で被災した。皆さんも大変な思いをしたと思う。今も大変だと思う。
□熊本はまだ1年しか経っていない。街の復興・復旧、生活の復興・復旧、魂の復旧・復興はこれからだと思う。阪神淡路から22年経ったが魂の復興はまだまだ。地震という災害の特徴は、心理的なダメージが大きいこと。地震の揺れは、足下、身体、心、魂、そしてすべてを揺らす。現在、熊本は再適応期に入るあたりだと思う。
□災害は忘れた頃にやってくるはもはや常識ではない。災害はいつもやってくる。地震活動期に日本は入った。また気候変動による風水害も頻発している。国連では日本を災害の多い国４位としている。世界の陸地の０．３%という狭い国土にもかかわらず、世界で起こったM6以上の地震の２０%が日本で起きている。日本には4つのプレートがあり、活断層は約２０００もある。
□日奈久断層は日奈久区間でＳランクとされており、Ｍ７．５が３０年以内に０～６%、八代海区間がＳランク、Ｍ７．３が３０年以内に０～１６%（全国的に言うと３番目の確率の高さ）とされており**しばらくは熊本は大丈夫は間違いである。**地球規模で言えば３０年で１６%は相当高い確率。
□さらに南海トラフは３０年以内に７０%、１０年以内が２０～３０%とさらに高く、確実に来る。阪神淡路で死者が約６５００人、東日本で約１９０００人だったが、南海トラフでは３２３０００人の死者が予想されている。大分、宮崎、鹿児島でも甚大な被害が予想され、避難者などを九州全体で吸収することになる。熊本にも多くの避難民が来ることが予想される。
□気候変動による豪雨被害や台風被害にも備えること。昔は１時間に５０mm降ればバケツをひっくり返したような雨といって驚いていたが、今は１時間に１００mmの豪雨が日本各地で起きている。雨の降り方が変わったのである。
□自助７、共助２、公助１の割合である。若い力こそ多くの命を助ける。まずは自助。しっかりと自分の命を助ける能力を身につけること。自分自身の防災能力を高めて、他人の命を守ってほしい。そして**生涯にわたって主体的に自分の命を守り、他者を助けることが出来るようにしてほしい。**
□①日常と非日常を的確に分けること、②非常事態宣言を自分の心に出すこと、③想像力を発揮し，決断力を持って即決することが災害時には大切。火事場の馬鹿力はあり得ない。日頃の訓練を続けてほしい。避難訓練は大切。

東稜高校防災通信　　平成２９年８月３１日（木）

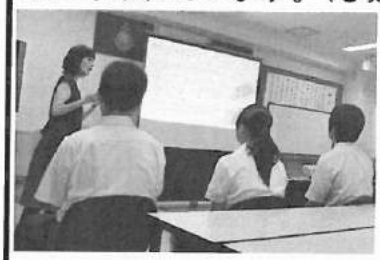
自興

とりあえず動きましょう

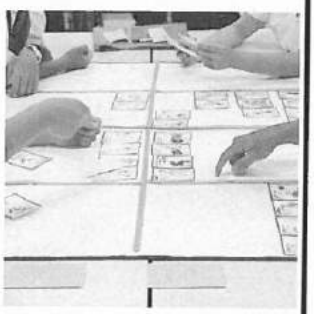
～災害で活躍するのは皆さん方です～

研修報告

８月２２日（火）午前９：３０分から熊本商業高校内蛟竜館１階で、熊本県教育委員会主催の避難所運営ゲーム研修が開催されました。東稜高校からは生徒防災委員が８名、熊本商業高校の生徒会６名、湧心館高校の生徒会７名の計２１名が参加、講師には、福島大学特任教授本多環先生をお招きして、前半は防災に関する講義が、後半は避難所運営ゲームが行われました。（避難所運営ゲームは、通称ＨＵＧと呼ばれています。（**ひ**難所の**Ｈ**、**う**ん営の**Ｕ**、**げ**ームの**Ｇ**の頭文字をとって**ＨＵＧ**と呼ばれています。）



前半の講義では、アイスブレークのために、竹籤タワーゲームが行われました。２１名を４班に分けて、竹籤と粘土を用いてより高いタワーを作ることを競うなかで、班員の親睦を深めていきました。その後、防災の基本についての講義がありました。「防災の基本は、①防火②耐震補強③家具固定④避難行動訓練⑤避難経路・避難場所の確保と確認」「自然災害は今のところ防ぐことが出来ない。防災とは被害が大きくならないように防ぐこと」「避難所では知らない者同士が協力してやっていくため、伝え合うことが大切」「とにかく発言する」「否定するのではなく、発言を受け止めてより良い提案をすること」「それぞれの経験、知識、想像力を出し合っていくことが大切」「正解がないので、みんなで協力して、より良い判断を積み重ねていくことになる」「意見は違って当たり前。意見は違っていた方がいい。意見はより多い方がいい」など示唆に富むものでした。



講義の中では、「大切な人がタンスの下敷きになっていて動けない状態。タンスは一人では持ち上がらない。火事が迫っている。あなたはどう行動しますか」など厳しい判断が求められる状況が与えられ、これらのことをどう判断するか、生徒は真剣に考え、議論していました。

後半では、ＨＵＧが行われました。ＨＵＧとは、発災直後次々とやってくる避難者を、避難所となっている体育館にどのように受け入れていくかを班員で話し合いながらすすめていくシミュレーションゲームで、最終的に出来上がった避難所は、各班とも全く違ったものになっていました。

本多先生によれば、「間違っているかもしれないが発言することが大切。発言がもし否定されたら新たに提案すればいい。とにかく行動しましょう。」というアドバイスをいただきました。

ＨＵＧの最後に、「災害に立ち向かうのは、警察、消防、行政だけではありません。自分が学んだこと、やってきたことを災害時に生かせる人になってください。（災害時はいろいろな技能能力を持った人が必要）災害で活躍するのは、警察・消防・行政だけではない。皆さんなのです。」という言葉で締めくくられました。

生徒の感想の中には、「研修の内容は日頃の生活でも役立つ」「冷静な判断力を身につけたい」「次は心のケアについて学びたい」などがあり、研修を通して、生徒は多角的な視点で地域を見る目を養い、安心・安全な社会づくりに貢献する態度が身についたと思われます。

東稜高校防災通信（第５号）　平成２９年９月７日（木）

自興

東稜高校生徒防災委員会

一人一人が意識を高くして生活をしましょう

多賀城高校訪問、松島の歴史学び

生徒防災委員長　山本　汐莉
生徒会長　三森　菜月

平成２９年８月２４日（木）、２５日（金）に東北研修に行ってきました。１日目は、宮城県多賀城高校を訪問しました。熊本地震の際、本校に義援金を送ってくださったことを切っ掛けに、多賀城高校とはこれまでも何度か生徒交流を行っています。学校訪問では、はじめに多賀城高校について紹介をしていただきました。その後、震災後に多賀城高校の生徒さんが作られた多賀城津波伝承「まち歩き」MAPを見ながら、まち歩きをしました。まち歩きでは、実際に津波が来て、たくさんの方が避難されていた歩道橋や、宝国寺にある樹齢約５００年の黒松である「末の松山」などを案内してくださいました。「末の松山」には、８６９年、今から約１２００年前の貞観津波も来なかったとされており、百人一首の和歌にも詠まれています。東日本大震災の時も松山に避難された方は助かったそうです。１０００年以上の時を超え、和歌という形で防災について伝えられてきたことに驚きました。また、多賀城高校の生徒で街中によって設置された２０ヶ所の津波標識を拝見しました。多賀城の津波は都市型津波という大変複雑な珍しい津波で、世界中から研究者が入っているとのことでした。

多賀城高校の皆さんとの記念撮影

その後、多賀城高校に戻り、生徒会と災害科学科の生徒さんと交流会を行いました。そこでは、多賀城高校にある災害科学科についての紹介がありました。また、事前に用意していた質問にも丁寧にわかりやすく説明してくださいました。生徒さんの積極性と明るさが印象に残っています。災害に関することだけでなく、街の魅力も同時に伝えるように心掛けているそうです。「スマイル・防災」がキャッチフレーズだそうです。またボランティアも労働力提供型のボランティアだけでなく、生徒自らの特技を活かして提案型、課題解決型のボランティアを行っておられ、観光地で生徒バンドがフェスを行い、地元を盛り上げるなど、大変勉強になりました。

多賀城高校の皆さんとの記念撮影

９Ｍ級の防波堤

２日目は、多賀城高校の校長先生が計画を立ててくださり、宮城県松島高校の先生と一緒に松島の町の案内をしてくださいました。松島は歴史ある建物や、伝説がたくさんありました。由来やエピソードなど教えていただいたので、街に魅力を感じ、またいつか松島に来たいと思いました。その後、９メートル級の防波堤を見せていただきました。実際に近くで見るととても大きく感じました。

その後は、多賀城高校に戻り、学食で昼食を食べさせていただき、午後からは、５時間目に行われているいろいろな授業を見学させていただきました。ipadを使った授業や、防災科学科の「生命環境科学」や「くらしと安全」の授業など東稜高校にはないものがたくさんありました。

今回の東北研修では、たくさんのことを学びました。その中でも震災時の状況や、地震に対する備え、防災に対する一人一人の姿勢など多くのことを学びました。今回防災に関して学んだことを、周りに伝えていくことが大切だと思いました。

他人事ではなく一人一人が意識を高くして生活を送っていきましょう。

東稜高校防災通信

平成２９年９月２２日（金）

自興

東稜高校生徒防災委員会

「人との繋がりの大切さを実感」

熊本×東北　ＩＷＡＫＩ　ＨＡＢＡＴＡＫＩ
復興の輪プロジェクト　参加報告
参加者　井上愛海、米森美咲、遠山奈月、渡邉有帆

ＩＷＡＫＩ　ＨＡＢＡＴＡＫＩ　復興の輪プロジェクトとは、宮城県と東京都を会場として、「震災を経験した私たちだからこそ出来る支援を熊本に」をスローガンに、熊本の同世代の人たちとともにお互いの将来や復興について考えるプロジェクトです。震災体験、復興への想いを共有する場を作り、東北と熊本を繋げ、またそれぞれの地域で活動する切っ掛け作りを行い、持続可能な環境づくりに努める取組です。

プロジェクトに参加して

◇私がこのプロジェクトに参加して感じたことは、人との繋がりが大切であるということです。熊本と東北では地震の被害も大きく違いました。しかし、どちらも人との繋がりは大切であり、助けられた場面がたくさんありました。私は、繋がりを大切にするためにも日頃から挨拶など小さなことから大切にしていきたいと思います。また、自分に何ができるのか、どういうことができるのか考えるようになりました。1週間でしたが、自分のことについて考え、様々な地域での助け合いや繋がりを感じることができました。**(渡邉)**

◇日程も急遽変更になり、出発時間が早まったりと早々から不安も多いプロジェクトでしたが、体調を崩すこともなく無事終えることができ良かったです。普段日常生活では話す機会のない震災への思いや、自分の震災体験について話すことができ、改めて熊本地震を振り返るとても良い機会でした。**(遠山)**

◇今回のHABATAKIプロジェクトに参加できたことは私にとってとてもいい経験になりました。私はこのプロジェクトで特に印象に残っていることが２つあります。１つ目は、東日本大地震で被災した地域のことです。テレビでは、震災から６年経った今でもがれきの撤去などがされておらず、復旧がまだまだのように映っていました。でも、実際見に行ってみると、復旧どころか今回のことを生かして工夫された建物が多くありました。実際に自分の目で見ることはとても大切なことだと思いました。２つ目は、自分自身のことです。私はもともと人に自分の意見を言うことが苦手でした。でも、ある夜のシェアリングで、同じことを経験した仲間と話したり聞いたりすることができて、自分のことを話すことに対して抵抗を感じることが少なくなりました。普通に生活していれば、絶対に出会うことのない人たちと出会い、喋ることができたので、このプロジェクトに参加できて良かったです。この経験が無駄にならないよう、自分にできることは積極的に参加しようと思いました。**(井上)**

◇私はこの活動に参加して、改めて震災の恐怖や残酷さ、防災の大切さを実感しました。そして、特に強く感じたことが、自分があまりにも無知だったということと、直接行ってみないと分からないことがほとんどだということです。実際、私の東日本大震災に関する知識はマスメディアのみでした。それでも私は、その震災のことを、さも全部知っているような気分でいました。しかし、HABATAKIに参加し、初めて東北の人達と交流したとき、本当に衝撃を受けました。以前の私の知識は、この交流で知ったことの１割にも満たないほどでした。また、以前想像していた東北の町と、実際見た東北の町もかなり違いました。私が想像していた現在の東北の町は、あれだけひどい被害にあったのだから、ほとんどまだ更地だろうと思っていましたが、まだまだ工事は多いものの、意外にも駅や商店街ができていて、復興が進んでいるのを身に染みて感じ、なんだかとても感動しました。このプロジェクトに参加できて心から嬉しく思います。自分の視野がたった一週間だけで、何倍も、何十倍も広がりました。とても楽しかったです。しかし、その気持ちと同じくらい胸が締め付けられるような気持ちになることもありました。いつ起こるのか誰も分からないからこそ、いつまでもこの気持ちを忘れずにいなければならないと思い、また、私が体験してきた貴重な東北での話を、まだ知らない人達にも伝えていきたいと、初めてそんなことを思いました。成長できたかは分らないけど、自分を変えてくださったこと、本当に感謝しています。また来年も参加したいと思っています。ありがとうございました。**(米森)**

櫻井友香さんをはじめIWAKI-HABATAKIプロジェクトのスタッフの皆さん、このような機会を私たちに与えていただき本当にありがとうございました。

プロジェクトの内容
８月３日～８月８日
（宮城県）
亘理町での植樹
国際交流
石鹸つくり体験
女川町探索
シェアリング
（東京）
ワークショップ
プレゼンテーション

東稜高校防災通信（第６号）　平成２９年９月２６日（火）

自興

東稜高校生徒防災委員会

自分のためにボランティアに行こう

３年生の志望理由書やエントリーシートなどの添削指導をしていると、多くの生徒はボランティアに参加したことを書いてきます。しかしよく読むとボランティアに参加することが目的となっているケースに出くわします。大学側が知りたいのは、ボランティアを通して、何を感じ、何を考え、どのような問題意識を持ち、どのように受験生が主体を変容させ、成長したかだと思われます。

今回は、７月に兵庫県西脇市で行われた全国防災ジュニアリーダー研修会の中で行われた講演会「ボランティアについて考える」（講師　舞子高校　和田先生）の内容を紹介します。

ボランティアで、自分自身を高めてください。とにかく参加してみましょう。

■まず、返事か良くない。行動がてきぱきしていない。「お願いします」「ありがとうございます」が一番に言えるような人になることが大切。

■ボランティアには、大きいボランティアと小さいボランティアの２種類がある。皆さんが想像するのは大きいボランティアだと思う。バスで席を譲る、募金をするなどの小さなボランティアが大切です。

■専門家によっても若干異なるが、ボランティアには５つの要素がある。それは

①社会性（公益性）学校を休んで行くものではない。周りに迷惑をかけてするものでもない。

②自発性（自主性）人に言われてやるものではない。周りに認められるためにやるものでもない。

③創造性（独自性）得意なこと、やれることをやればいい。

④無償性　お金をもらわない（仕事でやるわけではない）

⑤継続性　続けてやること

■復旧は災害前の状態に戻すこと。復興は災害の前よりも良くすること。ボランティアは復旧、復興のために行うことがほとんど。「してあげる」ではなく、「させて頂く」という気持ちが大切。「してあげる」という人にボランティアをしてほしい人はいない。ボランティアを続けると、このことがわかってくる。「ありがとうと言われてうれしかった。またボランティアを頑張りたい。」はいかがなものか。「ありがとう」は、あくまでも副産物。目的ではなく結果。結果的に言われるのはいいが、ありがとうと言われるためにするものではない。ただし、ありがとうという温かい言葉をいただくと人の優しさを知ることが出来る。

■ボランティアの目的は、依頼されたことをきっちりやること。役に立つこと。役に立つことをさせて頂くことです。特に若者にしか出来ないことがある。それは、体力と繋がる力。若いと体力がありよく動くことが出来る。また、若いとすべての世代に対応できる。同世代の人は勿論、子どもとも、高齢者とも、仲良くなることが出来る。話が出来て繋がりが出来たら、その繋がりを持ち続けること。話をしていただいて有り難いという感謝の気持ちを伝え、地元に戻って伝える。最低でも２回は同じ場所に足を運ぶこと。繋がり続ける。伝え続ける。語り続ける。

■ボランティアの負の部分もある。へこんで返ってくることもよくある。役に立てない。技能がない。迷惑をかけた。空振りも最初は多いが、振らないとあたらない。失敗していい。微力であるが無力でない。復旧はボランティアの力だけで出来るわけがない。失敗を糧に前進すること。（まず参加することが大切）

■行く前には、事前学習（地名、歴史、名産品、被災状況など）、体調管理、積極的傾聴を。聴く力が大切である。

東稜高校防災通信

平成２９年９月２９日（金）

自興

東稜高校生徒防災委員会

一人一人が意識を高くして生活をしましょう

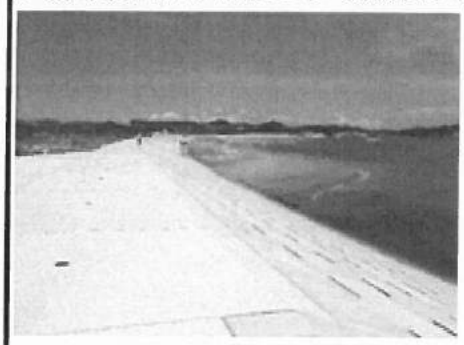
多賀城高校訪問と松島の歴史を学ぶ

生徒防災委員長　山本汐莉

百人一首　清原元輔

平成２９年８月２４日（木）、２５日（金）に東北研修に行ってきました。１日目は、宮城県多賀城高校を訪問しました。　熊本地震の際、本校に義援金を送ってくださったことを切っ掛けに、多賀城高校とは本校と何度か生徒交流を行っています。　学校訪問では、はじめに多賀城高校について紹介をしていただきました。その後、震災後に多賀城高校の生徒さんが作くられた多賀城津波伝承「まち歩き」MAPを見ながら、まち歩きをしました。まち歩きでは、実際に津波が来て、たくさんの方が非難されていた歩道橋や、宝国寺にある樹齢約５００年の黒松である「末の松山」などを案内してくださいました。「末の松山」は、８６９年、今から約１２００年前の貞観津波も来なかったとされており、百人一首の和歌にも詠まれています。東日本大震災の時も松山に非難された方が助かられたそうです。１０００年以上の時を超え、和歌という形で防災について伝えられてきたことに驚きました。また、多賀城高校にお生徒で街中に設置された２０ヶ所の津波標識を拝見しました。多賀城の津波は都市型津波という大変複雑な珍しい津波で、世界中から研究者が入っているとのことでした。

その後、多賀城高校に戻り、生徒会と災害科学科の生徒さんと交流会を行いました。そこでは、多賀城高校にある災害科学科について紹介してもらいました。また、事前に用意していた質問にも丁寧にわかりやすく説明してくださいました。生徒さんに積極性と明るさが印象に残っています。災害に関することだけでなく、街の魅力も同時に伝えるように心掛けているそうです。「スマイル・防災」がキャッチフレーズだそうです。またボランティアも労働力提供型のボランティアだけでなく、生徒自らの特技を活かして提案型、課題解決型のボランティアを行っておら、観光地で生徒バンドがフェスをい、地元を盛り上げるなど、大変勉強になりました。



９Ｍ級の防波堤

多賀城高校の皆さんとの記念撮影

２日目は、多賀城高校の校長先生が計画を立ててくださり、宮城県松島高校の先生と一緒に松島の町の案内をしてくださいました。松島は歴史ある建物や、伝説がたくさんありました。由来やエピソードなど教えていただいたので、街に魅力を感じ、またいつか松島に来たいと思いました。その後、９メートル級の防波堤を見せていただきました。実際に近くで見るととても大きく感じました。

その後は、多賀城高校に戻り、学食で昼食を食べさせていただき、午後からは、５時間目に行われているいろいろな授業を見学させていただきました。ipadを使った授業や、防災科学科の「生命環境科学」や「くらしと安全」の授業など東稜高校にはないものがたくさんありました。

今回の東北研修では、東北の方々の温かい心に触れ、たくさんのことを学びました。その中でも震災時の状況や、地震にする備え、防災に対する一人一人の姿勢など多くのことを学びました。今回防災に関して学んだことを、周りに伝えていくことが大切だと思いました。

他人事ではなく１人１人が意識を高くして生活を送っていきましょう。

札行

東稜高校防災通信（第　号）

平成２９年10月30日（月）

自興

東稜高校生徒防災委員会

今回は、2017年9月15日（金）付け日本経済新聞からのものです。今若者を中心に防災士の資格を取る人が増えています。

日本經濟新聞　2017年（平成29年）9月15日（金曜日）

育て 若き防災リーダー

資格取得 後押しの動き

中高生向けにキャンプや講座

防災意識が高く、一定の知識・技能を習得していることを示す民間資格「防災士」を高校生に取得させる動きが広がっている。首都直下地震や南海トラフ地震など、発生が懸念されている大規模災害に向けて、若い世代を地域の防災リーダーに育てるのが目的。資格取得という具体的な目標を示すことで、生徒の学ぶ意欲を引き出す狙いがある。

「防災士はどんな困難に出合っても命を守る役割があります」。8月下旬、東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県南三陸町のホテルで、元消防士の講師が東京都内の高校生ら101人に語りかけた。

都が実施した「合同防災キャンプ」の一幕。生徒らは講義を受けるだけでなく、水産加工品の袋詰めや漁業体験といった復興支援ボランティアに取り組んだり、現地の人から被災体験を聞いたりした。

2泊3日の宿泊研修の終盤には、キャンプで学んだことを踏まえて首都直下地震への対策をグループごとに発表。「今までの避難訓練を見直し、実際の災害を想定したものにする」「災害時に円滑にコミュニケーションを取れるよう、普段から近所の人にあいさつする」など様々なアイデアが出た。

防災キャンプで学んだことをグループごとにまとめる高校生（宮城県南三陸町）

一連の研修は防災士の養成カリキュラムの一環となっており、試験に合格すれば資格が得られる。参加した高1の大野千星穢さん（15）は「テレビで東日本大震災のボランティアを見てからずっと来てみたかった。資格が取れたら、自信をもってボランティアに参加できる」と意欲を見せた。

都が防災キャンプを行うのは昨年に続き2回目。昨年は生徒と教諭ら101人が参加し、全員が防災士の資格を取得した。都の担当者は「資格取得という分かりやすい目標を設定することで、学習意欲を引き出せた」と説明する。

岐阜県御嵩町は今年から、高校生向けに防災講座を開催。防災士試験の受験料やテキスト代などを町が負担することで資格取得を促したところ、参加した高校生15人のほとんどが受験。多くが合格した。

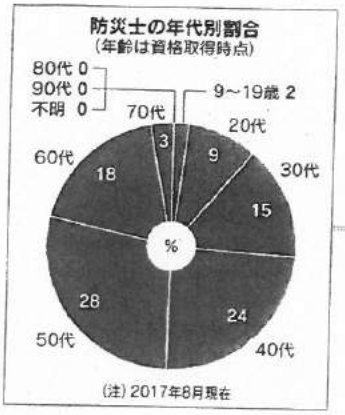
同町では5年前から、大人向けに防災講座を開き、これまで約180人が受講。若い世代の防災意識を高めようと高校生向けの講座も始めた。担当者は「来年はさらに参加者を増やしたい」と話す。

徳島県でも2015年度から、中高生対象の防災士養成講座を開いている。夏休み期間を使い、防災に関する講義や救急救命講習などを2日間、計12時間にわたって実施。初年度は117人が参加し、今年は144人に増えた。県教委の担当者は「地域の過疎化が進む中、若い世代に地域防災の担い手になってもらいたい」と期待を寄せる。

防災士の資格取得をきっかけに、防災・減災に積極的に取り組むようになった若者たちもいる。明石工業高等専門学校（兵庫県明石市）では15年7月、防災士となった学生有志が防災団を設立。地域での避難訓練を主導したり、すごろく方式の防災ゲーム「RESQ」を開発したりした。

▼防災士　NPO法人「日本防災士機構」（東京・千代田）が認定する民間資格。阪神大震災の教訓を生かし市民による防災の取り組みを進めるため、2003年に同機構の創設とともに設けられた。同機構が認定する研修機関で講義を受けたうえで、試験に合格する必要がある。救急救命講習も受けなければならない。8月末時点で13万3千人が認定されている。同機構によると、資格取得者は40～60代が多いが、ここ数年は10代が増えている。

防災士の年代別割合
（年齢は資格取得時点）



（注）2017年8月現在

日本防災士機構によると、防災士の資格を持っているのは全国で13万3700人（8月末時点）。このうち9～19歳は3049人で、全体の2%にとどまる。若い世代の資格取得者は右肩上がりで増えているが「ほかの世代に比べればまだまだ」（同機構の担当者）なのが悩みだ。

2016年2月に内閣府が行った調査でも、災害への備えについて「取り組んでいる」と答えたのは15～24歳で30・8%。65歳以上（47・7%）や55～64歳（42・2%）を大幅に下回っており、若年層の防災意識の低さがうかがわれる。

若年層の意識向上課題

9～19歳の防災士は2%

阪本真由美・兵庫県立大准教授（防災教育）は「小中学校は授業で防災を取り上げることが多いが、高校では大学受験に関係ないことなどを理由に軽視しがち」と指摘する。「資格取得は防災を学ぶきっかけになるが、ゴールではない。地域の避難訓練に参加するなど経験を重ね、実際の災害現場でも活躍できるようになってほしい」と強調する。

東稜高校防災通信（第８号）　平成２９年１１月８日（水）　東稜高校生徒防災委員会

自興

今回は、Science Window2017 10-12（国立研究開発機構科学技術振興機構刊）からのものです。今、防災は、ハードからソフトへ重心を移しつつあるようです。皆さんもステレオタイプとなることなく、防災を、科学的根拠を持って、これから防災について、考え、学んでください。 ⇒ステレオタイプ：行動・思考様式が固定的で決まり切っている。また、その状態。（ベネッセ表現読解国語辞典）

人間の心理と行動を考えた無理のない防災対策を

災害に直面した時、私たちは何を感じ、どのような行動をとるのだろうか？
社会心理学の観点から日本の防災のありかたについて研究を続ける
東京大学特任准教授の関谷直也さんに人間の心理と防災の関係について聞いた

関谷直也
（せきや・なおや）
東京大学大学院情報学環 総合防災情報研究センター特任准教授、福島大学うつくしまふくしま未来支援センター客員准教授

防災 問答 あなたは どう思う？

日頃から、防災へ意識を高めておくのはとても大切なことだ。でも、普段から防災のことを頭の片隅に置いたまま生活することなんてできるのだろうか？

工学的な解明だけでは、災害から人々の命は守れない

あらゆる自然災害から私たちの生活と命を守るためには、その災害のメカニズムを科学的に解明することが欠かせない。科学的な知見は工学に生かされ堤防や避難施設といった設備と、行政の避難計画などが整備される。しかし、こうした工学的なアプローチのほかにもう一つ、見落とされがちだが大切なことがあると東京大学特任准教授の関谷さんは指摘する。

「私は災害そのものだけでなく、人間が災害に直面した時にどのように行動するのかを明らかにする必要があると考えています。人間の心理と行動を理解することが災害から人々の命を守ることにつながるのです」

関谷さんは学生時代から環境問題に対する人間の心理と社会への影響に関心をもち、現在は社会心理学的に災害の研究を続けている。東日本大震災以降は積極的に被災地を訪れ、現地調査を重ねながら未曽有の大災害に対して人々がどのように行動したかを研究している。

事実を単純化し過ぎた「車の避難は危険」という通説

東日本大震災が発生した時、津波に押し流される自動車の映像がテレビで繰り返し流れた。メディアは「津波の時に自動車で避難するのは危険ではないか」と問題提起した。しかし関谷さんは、自動車による避難は誤った行動だと決めつけるべきではないと考えている。

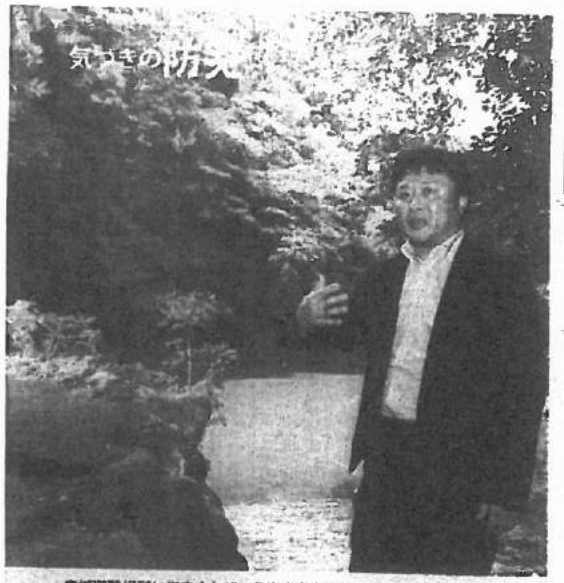
「津波が発生した地域では、公共交通機関による避難はできませんでした。山が迫る地形では自転車も使えません。普段から使っている自動車で逃げるのは当然の選択でした」

東日本大震災の浸水地域の住民数は推定で約60万人だった。このうち、死亡者は約1・8万人。58・2万人が助かり、その約半数の30万人が自動車で避難した。もし自動車での避難を全面的に禁止していたらもっと多くの人々が亡くなっていただろう。

自動車で避難すると道路が渋滞して、避難が遅れるという指摘も聞かれる。しかし、関谷さんの調査によると東日本大震災では、気仙沼市や石巻市、仙台市近郊では大規模な渋滞が生じたが、それ以外では渋滞は起こらず、自動車でもスムーズに避難できた地域は多数あったという。

「こういった事実が示すのは、車の避難を一律に禁止するのではなく、経路・通行量・人口など、地域ごとの事情を踏まえて考えるべきだということです。にも関わらず、津波の時は車で逃げてはいけないという考えが通説になってしまいました。この現象の背景にあるのは、『ステレオタイプ』という人間の心理です」

私たちは、複雑で膨大な情報を記憶し、理解することができないため、他人の心や世の中で生じている出来事を理解する時に、それらを単純化しようとする心理が働くという。この単純化した描像がステレオタイプだ。自動車で避難するのは危険という通説も、避難行動にはさまざまなパターンがあることや地域の事情が省かれたステレオタイプから生まれたものだといえる。



広域避難場所に指定されている東京大学本郷キャンパス。「都心で大地震が起きたら、まず火災のリスクを判断して、鎮火するまでは広域避難場所に避難してほしい」と関谷さん。

そのときどうするべきか、体験に学ぶ
宮古市田老の「学ぶ防災」

岩手県宮古市の田老地区は、慶長三陸地震津波（1611年）、明治三陸津波（1896年）、昭和三陸津波（1933年）など、たびたび記録的な大津波の被害を受けてきた。1966年には高さ10m、総延長約2.4kmの巨大防潮堤を完成させたが、東日本大震災（2011年）の大津波でその一部が倒壊し、再び壊滅的な被害を受けた。

巨大な堤防だけでは住民の命は守れなかった。命の重さを身をもって体験した人たちがガイドとなり、田老を訪れる人に向けて"てんでんこ"の大切さを伝える。（一般社団法人宮古観光文化交流協会・学ぶ防災係　TEL:0193-77-3305）

「学ぶ防災」では、田老の防潮堤に立ち、ガイドの語る3.11を聞く。「たろう観光ホテル」（2016年撮影）の6階では、そこで撮影された当日の映像を見ることができる。

東稜高校防災通信

平成２９年１１月１４日（火）

自興

東稜高校生徒防災委員会

安全第一　東稜高校周辺　安全マップ

学校周辺で苦情が多い地点とその内容

①並進の苦情が多い。道幅が狭く、自動車同士もどちらかが停車しておかないとすれ違うことができない。

②登校時に裏道を抜けてくる生徒多数。信号待ちの車列の間から飛び出す生徒がいる。

②下校時に信号待ち中の車列を右側から追い越していく生徒多数。正面衝突の危険性大。

③変則的な交差点。交通量が多く信号機もないため安全を十分に確認して横断歩道を渡る必要あり。

④信号の点滅や赤信号で強引に渡る生徒がおり、苦情が多い。

⑤住宅街の中を抜けてくる生徒がいる。私道のため通行できない。苦情あり。

⑥登校時に停車中の車両の間を無理矢理抜けてくるため、車に接触する時がある。

⑥下校時に右側通行する生徒がいる。道幅も狭く交通量が多いため非常に危険。

⑦止まれの標識があるが、一時停止しない生徒が多い。（自転車は軽車両扱い）

安全マップ作成で皆さんの通学路を見る視点が一つ増えたと思います。日頃から、危険箇所や緊急時、身を寄せることが出来る施設などを記憶しておいてください。東稜高校周辺の道路事情は決してよくありません。日頃から時間に余裕を持って行動してください。一旦停止、安全確認を徹底してください。出来るだけ安全を作り出しましょう。

東稜高校防災通信

平成２９年１１月２０日（月）

自興

東稜高校生徒防災委員会

校長賞に2年5組　宮﨑　玲君の「浄傘」

２０１７防災グッズアイディアコンテスト結果発表

【審査結果】

学校長賞　２年５組１９号　宮﨑　玲
最優秀賞　浄傘（災害時傘で水をためて貯めた水を飲み水に浄化できる機能を持つ傘）

優秀賞　３年国組２８号　直江　佳香
車中泊を快適にするシーツ。水に浮くため溺れている人の救命道具にもな
また水を貯めることも出来る。

優良賞　２年５組３１号　田上　桜
自家発電つき簡易流し。水を貯めることが出来て断水時もある程度使用でき
また引き出しには、水回りの生活用品が備えるけられている。

優良賞　２年３組２２号　五十嵐　千紗
カプセル入りコンパクト液体歯磨き。口に含むだけでカプセルが溶けて、
歯磨きをした状態になり、免疫力低下を防ぐ。

優良賞　２年３組３６号　西村　唯
スーツケース型簡易ベッド。広げると簡易ベッドになる。リクライニングも
出来て、要介護者の負担と避難所での介助を助ける

佳作　２年６組１１号　田上　竜誠、２年理組４０号　山本　汐莉、２年３組２１号　赤星　明佳
２年３組３３号　高尾　みくり、１年７組３３号　中原　璃良、１年７組　６号　髙間　佳杜
１年７組１９号　村松　大地

【評】

被災経験を活かしたものより具体的アイディアグッズの提案が目立った。最優秀賞の作品は、自身の体験から人間の生命維持に必須である水の確保を主題としたアイディアグッズであり、秀作である。優秀賞は一つのものに多くの機能を盛り込み、様々なシーンで役立つように考え込まれた秀作であった。他にも良い作品が多く寄せられ、急遽佳作を設定し表彰の対象とした。被災の経験から具体的なものが多く素晴らしいが、今後は各自の進路希望分野に特化した、多少空想が入っても良いので、画期的提案も期待したい。例えば、電気を有線でなく無線で送ること、すなわち電気を電波に乗せて送ることが出来れば、震災時の停電は受信機さえあれば解消されることになる。これは、石油資源の可採年限を伸ばすことにも繋がり未来の人たちにも貢献できる。宇宙空間には無尽蔵に太陽光が降り注いでおり、ソーラーパネルを搭載した人工衛星を打ち上げ、宇宙空間から電気を電波に乗せて送れば、無尽蔵に電気が得られることになる。多少空想が過ぎる部分はあるが、現代のテクノロジーはつい１００年前までは空想の域にあった。画期的なアイディアを出し、進学先で研究開発する人材になってほしい。時代を創る人が出てくることも期待したい。社会の有為な形成者となるべく日々学問に打ち込んでほしい。（防災主任）

東稜高校防災通信

平成２９年１１月２４日（金）

自興

東稜高校生徒防災委員会

避難訓練を終えて
「憂いがあるから備える」
命みなぎる行動で生きる希望になってほしい

11月16日（木）７限目　防災教育（Ⅲ）
東消防署託麻出張所　楢崎所長　講評・講話より

■今回の訓練のポイントは３つ。

①**命を守る行動が出来たか。**緊急地震速報が入った際または揺れはじめた時点で頭を守る行動がとれたか。

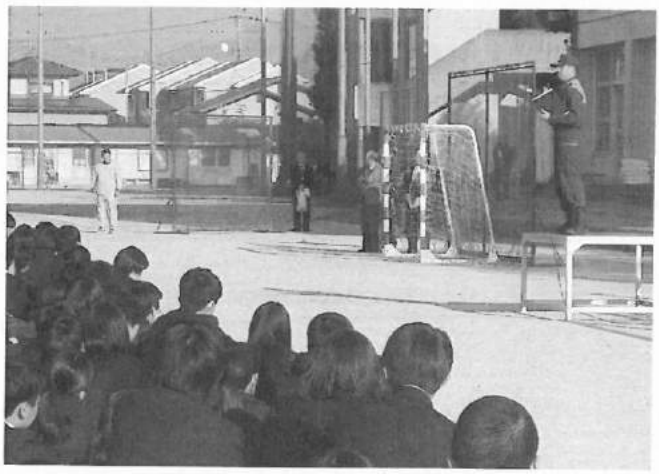
②**情報の共有が出来たか。**非常放送等で、避難経路や火災の情報が得られた際に周囲の人と情報を確認し合い、周囲の人に知らせることが出来たか

③**行動するときに相互協力が出来たか。**避難中に勝手な行動をしないことは勿論、一時避難したとき人員及び負傷者等の把握のための確認作業に協力できたか。

点呼完了まで６分０１秒でタイム的には良かった。

しかし安全に避難することが第一である。

■次に大震災時にとってほしい行動について。昨年の熊本地震がもし昼間であったら、このように避難した後、地域住民がどんどん学校に避難してくることになる。だから皆さんが避難して無事を確認した後、避難してくる住民の受け入れ態勢を整える準備に協力してほしい。この学校のことをよく知っている皆さんの協力が不可欠。今後はそのことも意識しながら訓練にのぞんでほしい。学校として、学年として、クラスとして、あるいは部活動として、何が出来るかを考えて、自分自身が出来ること、やるべきことを確認してほしい。



■最後に、「備えあれば憂いなし」と言うが、大地震を経験した君たちはこの言葉が正確でないことを知っていると思う。どんなに備えても憂う。どんなに備えても自然災害は発生し、悲しい場面に遭遇する。だから「憂いがあるから備える」と考えてほしい。日頃から備えることで、避けられない憂いを少しでも和らげることは可能。どうか若い皆さんには全員生き延びて頂き、命みなぎる行動力で、多くの方々の生きる希望になっていただきたい。

東稜高校防災通信　保護者版

自興

平成２９年１１月２７日（月）

朝、時間に余裕を持った行動をご指導ください

交通事故が心配されます

東稜高校周辺道路　注意地点

学校周辺で苦情が多い地点とその内容

①並進の苦情が多い。道幅が狭く、自動車同士もどちらかが停車しておかないとすれ違うことができない。

②登校時に裏道を抜けてくる生徒多数。信号待ちの車列の間から飛び出す生徒がいる。

②下校時に信号待ち中の車列を右側から追い越していく生徒多数。正面衝突の危険性大。

③変則的な交差点。交通量が多く信号機もないため安全を十分に確認して横断歩道を渡る必要あり。（生徒通行不可）

④信号の点滅や赤信号で強引に渡る生徒があり、苦情が多い。

⑤住宅街の中を抜けてくる生徒がいる。私道のため通行できない。苦情あり。

⑥登校時に停車中の車両の間を無理矢理抜けてくるため、車に接触する時がある。

⑧下校時に右側通行する生徒がいる。道幅も狭く交通量が多いため非常に危険。

⑦止まれの標識があるが、一時停止しない生徒が多い。（自転車は軽車両扱い）

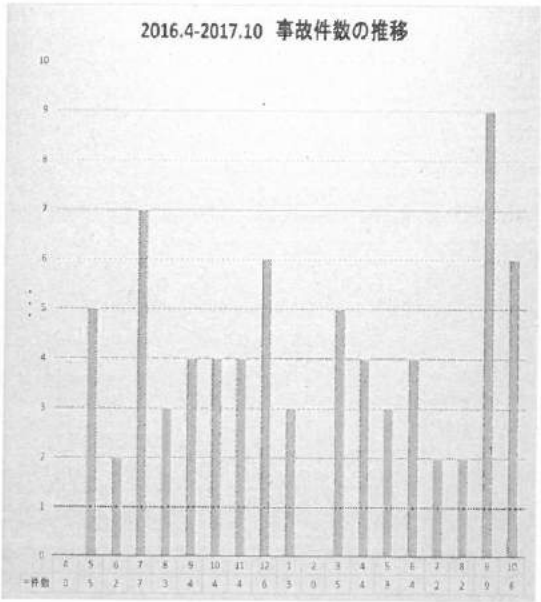
東稜高校生　通学状況

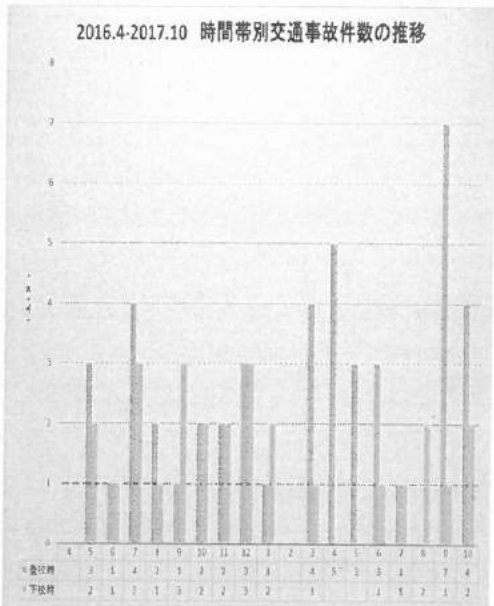
通学距離	～２	２～４	４～１０	１０～２０	２０～
%	２１	３４	３４	１０	１

通学手段	徒歩	自転車	原付	公共交通機関	その他
%	2	９１	3	3	1

左記の通り、10km圏内が生徒全体の9割、自転車で通学する生徒が約9割。つまり900名を超える生徒が10km圏内から、自転車で短時間に通学し、交通集中を起こすことになります。しかも東稜高校周辺の道路状況は決してよくありません。

H29　生徒交通事故の発生状況





曜日別事故発生状況

月	火	水	木	金	土日
7	6	4	3	6	4

例年12月に事故件数がピークになるものが、本年度、9月10月に大幅に増えています。これからさらに事故件数が増加することが心配されます。

また、本年度は朝の事故が多く、余裕を持った登校が大切です。

さらに曜日別にみると、週の始めと終わりに事故が集中しています。

1年生は修学旅行、3年生は入試、2年生もこの時期の学習量が3年生での成績の伸び幅を決める大切な時期です。

時間に余裕を持った、緊張感のある生活を送るように、ご家庭でもご指導をよろしくお願いいたします。東稜高校は事故0を目指しています。

東稜高校防災通信

平成２９年１１月２８日（火）

自興

東稜高校生徒防災委員会

非力な人間の中にある凄さを見いだす

第3学年　防災に関する小論文コンクール　結果発表

優秀賞　3年2組　井上　瑞貴

優良賞　3年4組　丸山　翔大

3年6組　宮嵜　準子

3年8組　木村　真南佳

佳作　3年1組　浦田　理來　3年4組　竹下　涼太　3年2組　上村　卓巳　3年2組　坂田　拡樹
3年5組　岩下　侑加　3年3組　中村　颯希　3年3組　松岡あかり　3年国際　幸　まゆ子
3年7組　堀　カケル　3年6組　金澤　麻里　3年7組　矢次　隼太　3年理数　中村　太城
3年6組　川口　朱菌　3年4組　落合玲於那　3年7組　成瀬　愛水　3年国際　坂本　裕磨
3年理数　森山　海路

（評）

熊本地震から１年。被災に濃淡がある状況で、防災意識にも温度差が出てきているように感じ、また今回の地震を感性で捉えるだけでなく、論理でもとらえることが必要ではないかと考え作問した。入試突破のためには、論理的思考能力が重要である。またこれから諸君が出ていく１０年後、２０年後の社会を考えるとき、その社会は大きな変革の波がうねり、これまでの経験など通用しない社会が待っている。そのような社会を生き抜くために必要なのは、日本人の精神と論理ではないかと考えられる。

このようなことから、今回の地震を不運で終わらせることなく、地震と正面から向き合い、当事者意識を持って災害への備えについて総括する切っ掛けを与えることが出来ればと考えた。逃げることなく正面から向き合い、考え抜くことで、自助・共助のために主体的に行動する人となり、また本校の掲げる「見えない学力の育成」に結びつけてほしい。

課題Ａでは、自分の事に固執することなく、体験談に終始することなく、今回の体験から何を考え何を学んだか。日常の有り難さを訴えることに留まることなく、その先の議論の展開をすることが肝要であった。

人の力ではどうにもならない人智を越えた自然の力を認めながらも、非力な人間の中のすごさ、模範となるべき人々を見いだし、考えを見いだす力が大切であった。

他人事ではないといいながら、他人事のようにとらえている答案、学んだことをはっきりと論じられていない答案、内容はあるが形式を満たしていない答案など、踏み込みが浅い答案が多かったが、全体的には前向きな忍耐力を感じるトーンが目立ち成長と希望があった。

課題Ｂは、総務省のデータを基にした、データ読み取り方の小論文として出題した。

データ読み取り方の小論文の命であるデータの読み取りは概ね出来ていたが、都合のいいデータのみに触れすべてのデータに触れていないものやデータ間の関連性の考察が甘いものが散見された。また当たり前のことを議論することに終始するものも多くあった。

今回の地震は、生活の基盤（経済）だけでなく、心の基盤（人間関係・コミュニティー）をも揺らした。郷土は傷ついた。しかしこれを機会に、郷土（共同体）の一員として、郷土を見つめ直し、郷土を愛する心を育んでもらいたい。現状回復を目指すだけでなくその先を見据えてほしいと思っている。今後諸君を生徒を待ち受けていると予想されるものは、復興特需のあとに訪れるであろう熊本限定の不況、少子化と相まっての人口流失による地域活力の喪失、ＡＩの勃興による雇用環境の激変などが考えられる。東稜高校で、自らを鍛え、自らを磨いき「自律自興」「一点突破」の東魂を身につけた諸君が、これらの課題に勇猛果敢にチャレンジして、地域を支え抜く人材となってほしい。３年生諸君の健闘を祈る。（防災主任）

（最優秀賞は、次号で紹介します。）

東稜高校防災通信　　平成２９年１月１７日（水）

自興

東稜高校生徒防災委員会

生きていることへの感謝を改めて思う

神戸「人と防災未来センター」を訪問して

生徒防災委員長　山本　汐莉

2017年9月16日兵庫県神戸市「人と防災未来センター」に行ってきました。とても立派なガラス張りの建物で、学校や海外などから団体で見学に来たりしていました。

「人と防災未来センター」は、1995年1月17日午前5時46分に起こった阪神・淡路大震災というマグニチュード7.3の地震の経験と教訓を継承し、防災・減災の実現のために必要な情報を発信する施設です。

最初に、震災体験フロアの1.17シアターで「5：46の衝撃」という映像を見ました。家や道路、田んぼやビルが崩壊するすさまじさを7分間の映像と音響で体験することができました。また、ジオラマ模型で震災直後の街がリアルに再現されてあり、震災直後の街を実際に歩いているようでとても複雑な気持ちでした。

大震災ホールでは、ある女性の実体験がドラマになっていて、タンスに挟まれた家族を亡くし、それでもボランティアの方々に励まされ頑張って生きているというドラマでした。このドラマを見た後には本当に「生きていてよかった」と感じました。

震災の記録フロアでは、震災後の写真や語り部の映像、記念に残された物が実体験とともに展示されていました。木造の家の形は残っておらずぺしゃんこになっていて、道路が瓦礫で車が通ることのできないようになっていたり、コンクリート造りの家やビルも柱が崩れたり、1つの階が潰れてビルが下がったりしていました。さらに、震災後すぐ起こった火災はとても大きな範囲で起こり、生活用品や家族との思い出の物が取り出せなかったと考えると胸が痛くなりました。復興の展示では、笑顔の写真も増えて、お互いに支えあいの手紙も交換もあったり希望が見え始めていたのが伝わってきました。

案内人の方は、とても親切で私たちに地震について話して下さったり、資料をいただいたり、研修に来たことを伝えると別の資料館にも案内していただきました。東北でも感じたことですが、おもてなしがすごくあり、また行きたいなと思います。また、防災・減災フロアもあり、地震のシミュレーションをして、家具のすべり止めやストッパーをする必要性を改めて感じました。

人と防災未来センターでは、阪神・淡路大震災の被害や悲惨さについて知ることができ、防災の大切さを学び身につけることができました。大人600円、高校生無料、毎月17日は無料となっているのでぜひ行って自分の目で見て体験してください。

東稜高校防災通信（第　号）　平成３０年３月１２日（月）

自興

東稜高校生徒防災委員会

あれから７年の月日が流れました。今回は宮城県気仙沼市立階上中学校で当時１０日遅れで行われた卒業式で読み上げられた答辞を紹介します。

伝説の答辞

今日は未曾有の大震災の傷も癒えないさなか私たちのために卒業式を挙行して頂き有難うございます。ちょうど10日前の３月１２日、春を思わせる暖かな日でした。私たちは、そのキラキラ光る日差しの中を希望に胸を膨らませ、通いなれたこの学舎を５７名揃って巣立つはずでした。前日の11日一足早く渡された思い出の詰まったアルバムを開き、10数時間後の卒業式に思いをはせた友もいたことでしょう。「東日本大震災」と名付けられる天変地異が起こるとも知らず……。

階上中学といえば「防災教育」といわれ、内外から高く評価され、十分な訓練もしていた私たちでした。しかし自然の猛威の前には人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切な物を容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というにはむご過ぎるものでした。辛くて、悔しくてたまりません。

時計の針は14時46分を指したままです。でも時は確実に流れています。生かされた者として顔を上げ常に思いやりの心を持ち強く正しくたくましく生きて行かなければなりません。命の重さを知るには大き過ぎる代償でした。しかし苦境にあっても天を恨まず運命に耐え助け合って生きていくことがこれからの私たちの使命です。

私たちは今それぞれの新しい人生の一歩を踏み出します。どこにいても何をしていようともこの地で仲間と共有した時を忘れず宝物として生きていきます。

後輩の皆さん階上中学校で過ごす「あたりまえ」に思える日々や友達が如何に貴重なものかを考えいとおしんで過ごしてください。

先生方、親身のご指導有難うございました。先生方が如何に私たちを思って下さっていたか、今になって良く分かります。

地域の皆さん、これまで様々なご支援を頂き有難うございました。これからも宜しくお願いいたします。

お父さんお母さん家族の皆さんこれから私たちが歩んでいく姿を見守っていてください。必ず良き社会人になります。

私はこの階上中学校の生徒でいられたことを誇りに思います。

最後に本当に本当に有難うございました。

平成２３年３月２２日　第６４回卒業生代表　梶原裕太

平成22年度『文部科学白書』より

東稜高校防災通信　　平成２９年２月５日（月）

自興

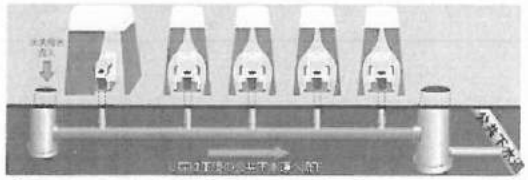
東稜高校生徒防災委員会

備災　災害時のトイレについて考える

■熊本市の取組（熊本市　ＨＰより）

熊本市では、「熊本市上下水道事業経営基本計画」に位置付けられている基本施策「災害に強い上下水道の確立」を実現する方策の一つとして策定した「マンホールトイレ整備計画」（平成 24 年度策定）に基づき、熊本市地域防災計画に避難所として位置付けられている中学校（下水道計画区域内の 38 校）を対象として、マンホールトイレの整備を行っています。

熊本地震発災直後は、市内全域で断水し、開設された多くの避難所でトイレ用水の供給が断たれました。そうした状況を受け、本震発災後には、上下水道局職員により熊本地震発生時までに整備された避難所である中学校 4 校にマンホールトイレ（全 20 基）を設置しました。マンホールトイレ設置後は、トイレ用水としてプール水等を利用するため、ボランティアの方々や学校関係者の皆様にご協力をいただきました。



<設置方針>
（1） マンホールトイレの設置数は、1 校あたり 5 基とし、そのうち 1 基は車いす用とする。
（2） 避難者が利用しやすい場所に設置する。
（3） 洗浄用の水が確保しやすく、利用しやすいところに設置する→プール水、河川水、用水路水など
（4） 可能な限り、照明用の電源が確保できるところに設置する。

災害時のトイレ事情

下の円グラフは、東日本大震災時に仮設トイレが避難所に行き渡るまでの日数を表したものです。熊本市でも、災害に備えて、対策が進められています。

しかし発災時にトイレがすぐに来るとは限りません。かなりの時間を要することがわかります。いざという備えのために、緊急トイレの作り方を知っておくと良いと思います。（右：日本トイレ研究所より）また和式の仮設トイレを洋式のトイレに変えることも上の写真の通り、工夫次第で可能です。

図：仮設トイレが行き渡るのに要した日数
（調査：名古屋大学エコトピア科学研究所、協力：日本トイレ研究所）

（日本トイレ研究所ＨＰ）

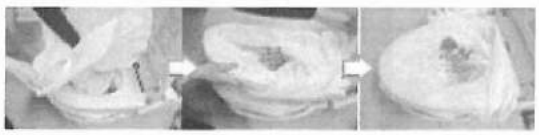
緊急用トイレの作り方

【準備するもの】新聞紙（見開き 2~3 枚）、ビニール袋 2 枚
（汚れ防止の観点から容量 45L 程度で、便座を覆える大きさであることが望ましい）

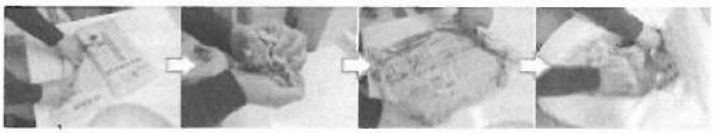
①まず、ビニール袋を便器に敷く

※ 便器内や水溜まり（水封）に、②の後のビニール袋が直接接触しないようにするため

②ごみ袋を便座にかぶせる（便座を覆うようにして裏側に折り返す）



③四つ折りの新聞紙をクシャクシャにした後、広げて四隅を折り曲げ、ビニールの底に敷く



④２枚目の新聞紙も同様にクシャクシャにした後、縦横の向きを変えてから底に敷く

⑤新聞紙を短冊状に数回切りさき、クシャクシャにして、ビニール袋の中に入れ完成

⑥ビニール袋の中に用を足した後は空気を抜いて袋を縛る。ごみ回収があるまで衛生的に保管

© 2015 Japan Toilet Labo.

東稜高校防災通信　　平成２９年２月７日（水）

自興

東稜高校生徒防災委員会

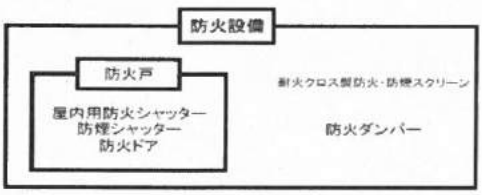
備災　防火扉について知る

■学校には、防火扉があります。今回は防火扉について、紹介します。

防火扉は、延焼を食い止めるためのもので、火災時に防火区画毎に、密閉空間を作ります。火は酸素がないと燃えないため、密閉された区画では延焼を防ぐ効果があり、消火活動の時間と建物から避難するまでの時間を作り出してくれるものです。

防火戸は、形状によって、扉タイプ、シャッタータイプ、シャッターとくぐり戸の組合わせたタイプに分類されます。

また普段は閉まっていて通行時のみ開ける閉鎖方式と普段は開いていて、火災時に発生する煙や熱を感知してから閉まる随時閉鎖式に分類されます。



【日本シャッター・ドア協会ＨＰより】

■潜り戸とは背の低く幅のせまい小さな戸のことで、かかんでくぐるようにして入ることから、この名がついています。防火戸は、一度閉められると通行することができなくなるので、シャッターの一部に潜り戸を設けて、通ることが出来るようになっています。

■右の記事からもわかるように、障害物で防火戸が機能しないことがないように、防火戸の周りにはものを置かないようにすることを気をつけなければなりません。これと同じように、緊急避難時に倒れたもので避難経路がふさがれて通れないということがないように日頃から注意が必要です。

アスクル火災

障害物で防火扉閉まらず　ドア施錠で消防進めず

産経新聞　2017.3.15

総務省消防庁と国交省が明らかに埼玉県三芳町の事務用品通販アスクルの物流倉庫火災で、一部の防火シャッターが正常に作動しなかったほか、ドアの一部が施錠され、消防隊の進入を阻んでいたことが１４日、分かった。延焼の拡大につながった可能性がある。総務省消防庁と国土交通省が設けた大規模倉庫の防火対策検討会で、両省庁や地元消防が明らかにした。

検討会によると、アスクルの３階建て倉庫内には、火災時に自動的に床まで下りて火の回りを防ぐ防火シャッターが一定間隔で設置されていた。だが２月の火災では一部のシャッターが全く下りていなかったほか、障害物のため閉まりきらないシャッターがあった。

地元消防は、火災発生後に建物内の階段から倉庫３階に入ろうとしたが、鉄製ドアが施錠され、先に進めなかったと説明した。倉庫２階は煙が濃く荷物が多いなどの理由で、既に進入できない状況だったという。

アスクル倉庫の火災は２月１６日発生。消火が難航し鎮火まで１２日かかった。

東稜高校防災通信

最終号

自興

東稜高校生徒防災委員会

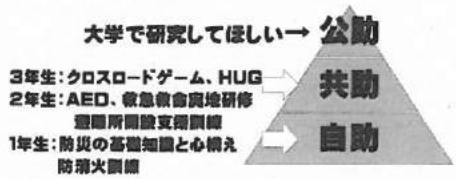
東稜高校が地域の守りとなれ

９７００→２０００→４００の数字が意味すること

東稜高校では、今年度、文部科学省と熊本県から研究指定を受けて、防災教育に取り組んできました。その取組の中心テーマの一つが、「地域防災力を高めるために東稜高校が果たす役割」でした。そのために、学校運営協議会を設立し、東稜高校のある山ノ内校区の自治協議会や防災担当の東区役所、警察や消防、医療関係者、山ノ内小学校の校長先生、防災士など様々な方々にご協力をいただき会議を重ねてきました。

また校内では、生徒防災委員会を立ち上げ組織としての防災力を、また防災教育（Ⅰ）～（Ⅳ）をとおして生徒一人一人の防災力を高める事に挑戦してきました。

山ノ内校区の人口は約９，７００人で、その内６５歳以上の高齢者は約２，０００人、その内介護を必要とする方が４００人です。昼間は、いわゆる現役世代の多くが、校区外に働きに出ており、もしも昼間に発災した場合、職員も含めて約１，１００人の東稜高校は、貴重なマンパワーであり、地域から貢献が期待されているのです。



「高校生は守られる存在でなく、守る存在である。」この言葉の意味がわかってもらえると思います。

「守る」ためには、まず「自分の身は自分で守ること（自助）」、次に「自分たちの身は自分たちで守ること（共助）」が大切ですから１年生は自助、２、３年生は共助をテーマに防災教育を進めました。公助は、皆さんの将来に期待しています。

防災教育は、命の教育です。理想論やきれい事は通用しません。否応なしに、命や現実と向き合う事になります。その中で、人の限界を知り、人と人との繋がりが人の命も心も救うことを学びます。そして、非日常を生き抜くために、日常を丁寧に一生懸命に生きなければならないという結論に至ります。防災教育を通じて、皆さんが、誠実に人と向き合い、自分と向き合い、自己を高めて、東稜高校を高めてくれる事を期待します。

（防災主任　竹中）

東稜高校防災通信

自興

東稜高校生徒防災委員会

津波てんでんこ

防災教育（Ⅳ）を終えて

津波てんでんこ

津波の被害に何度もあってきた三陸地方の言い伝え。「てんでんこ」は「てんでばらばらに」の方言で、津波の時は家族さえ構わずに、1人でも高台に走って逃げろという意味。家族や集落の全滅を防ぐために語り継がれてきた。

https://kotobank.jp/word より

２月２３日（火）１３：００から学習室３において、葛藤事例を用いた思考実験討論型の防災教育を行いました。授業で用いた葛藤事例は、「大津波警報が発令され、避難の途中で避難放棄者を発見したときにどうするか」というものでした。

様々な意見が出て、大いに議論が盛り上がりました。議論の中で自分の意見を変える人も出てきました。

皆さん方も大いに対話を楽しんでしてください。以下で、参加者の感想からいくつかを紹介します。

【感想①】自分の考えもしない意見が出たが、とても納得することが多くあった。自分の意見を持つことも大切であるが、相手の意見を聞きお互いが納得し、尊重していかなければいけない。クラスの人たちや先生方にもこの話し合いをしてもらいたいと思った。討論形式だったので、内容が頭によく入ってきた。討論を授業で増やしてもらいたい。選択した理由を論理的に述べて相手に考えが伝わるようにしたい。

【感想②】価値観が全く同じ人はいないんだなと思った。だから１００％みんなが納得できる答えもないと思った。自分と異なる意見が出たとき同意できる場面がいくつもあった。また意見を衝突させて出てきた意見がしっくりくる気がした。人として成長できた気がした。大学ではもっと議論する機会があると思うので、自分の意見を発信し、他人の意見を取り込んでいきたい。今回の防災教育をとおしていろいろと学ぶことが出来ました。ありがとうございました。

【感想③】様々な意見が出て、視野が広がり、理解が深まった。普段起こらない事が起こってしまったときに、人間は正しい判断が出来るのか、良心は本当に働くのか不安に思った。津波てんでんこに反対する人も多かったが、実際の状況ではどうなのだろうと思った。前もって決めておくことが大切であると思った。

【感想④】意見が次々に言える人をすごいと思った。自分には意見はあってもそれを言葉にして言うことが出来ないし、違ったらどうしようと思ってしまう。先生がおっしゃったように震災は平等に降りかかってくるので、一人一人の意見が大切であると思った。意見を口に出して言うのは必要だと思った。参加できて良かった。

特　別　活　動　学 習 指 導 案　　別添資料13

（葛藤事例を用いた思考実験型討論授業）

日　時　　平成３０年１月２３日（火）
　　１４：００～１５：００
会　場　　学習室３
クラス　　３年生　受講希望者
　　１年生　２名
指導者　　竹中　京一

１　学年・学級　第３学年　受講希望者、第１学年２名
２　主　題　名　災害時におけるジレンマ対応　～ジレンマの状況下で防災倫理について考える～
３　資　　料　　「君ならどうする」
４　ね　ら　い

災害時の葛藤事例を用いて、正解のない状況で、他者の価値観を認知・分析して、承認・非承認することで、納得解を探す力の育成を目指す。非日常を考える中で、以下のことを踏まえながら道徳的、倫理的な判断力の育成を目指す。

①他者の考え方や価値観に触れながら自己の直感や論理、価値観を見つめ直す。
②人間の尊厳について考える。
③議論の中で、倫理的、道徳的根拠をもとに実践的な判断力を身につける。

５　教材観（授業方法及び主題設定の理由）

防災教育は命の教育である。防災教育で命を守ることが出来るが、教育を誤ると命を落とすことにもなる。実際、東日本大震災でも、マニュアル通りに行動して助かった命とマニュアル通りに行動して失われた命がある。防災教育は理想論ではなく現実論で考えなければならない。防災教育ではきれい事は通用しない。生徒も否応なしに、命や現実を考えることで自分と向き合うことになる。両立できない、普段の前提が成り立たない、正解などないジレンマの状況下での判断は生徒を成長させ大人にする効果が期待できる。

また北海道大学の加藤先生のいじめに関する調査によると、いじめのない学級といじめの発生した学級の間で生徒の規範意識に差はない。すなわち生徒の規範意識が低くて問題が起きたわけでなく、生徒が他の生徒の規範意識を知らないこと（他の生徒の規範意識を互いに低く見る傾向が強い）ことから問題が発生しているという研究結果が発表されている。故に議論の中で、他者の価値観に触れることは重要で有り、この蓄積が自他の尊厳の尊重に繋がり、問題を未然に防ぐものと思われる。

また共助においては、人と人との繋がりが人の命も心も救うことを考えれば、討論型授業で、生徒同士関わりを持つことは，重要であると考えた。

以上のことから、ジレンマ教材を用いた討論型の授業として、主題を設定した

６　生徒観（生徒の実態）

①主な参加者である３年生には防災教育において、クロスロードゲームや避難所運営ゲーム（ＨＵＧ）を実施しており、ジレンマの状況下での判断を経験している。ただし、相手に配慮しながら、根拠を明らかにして議論することに慣れていない者が、多いと思われる。また各クラスからの希望者が参加しているため、生徒同士の繋がりが弱い。

②次表コールバーグの道徳性の６段階で生徒の状況を考えると、段階にかなりのばらつきがあることが考えられる。

③震災から十分に時間が経過しておらず、本授業の実施にあたっては、心理的に配慮が必要である。

コールバーグによる道徳性の6段階			
1段階	前習慣的段階	懲罰的志向	罰を受けるのがいやだから。損したくない。
2段階		快楽的志向	後で後悔したくないから。
3段階	習慣的段階	よい子志向	周りからよく思われないから。
4段階		法と秩序志向	法律で禁止されている。お金は命に代えられない。
5段階	超習慣的志向	社会契約志向	法律から得られる恩恵と同じように拘束も受けなければならない
6段階		普遍的な倫理観的原理志向	正しさを自ら選択した倫理原理に従う良心で決定

7　指導観（指導上の留意点）

以上のことを踏まえて、以下の点に留意して指導を行う。

①授業の導入において簡単なジレンマ事例を用いて、議論のマナーについてトレーニングを行う。

②震災から間もなく心理的な配慮が必要な生徒も多いため，今回は命の差し迫った事例は避ける。

③より高い倫理観道徳性が身につくよう支援に徹する。またゼイガルニク効果で授業後も考え続けられるようにオープンエンドの授業とする。またプラス１方略を意識して、生徒同士の学習のダイナニズムを大切にして授業を進める。

8　評価

思考、判断、根拠などを授業の中で適宜記入するワークシート（別紙）で、道徳性の段階や根拠の確かさを評価する。（ワークシートは授業終了後、回収する）

9　指導過程

時間	学習内容	指導上の留意点他	支援・発問	備考
導入 ２０分	①状況確認 資料①を読み、登場人物の置かれた状況を理解する。 ②価値観の相互確認 主題や資料内容について話し合う。 ③意見の分類・整理 シートに立場と根拠、逆の立場の意見への質問を記入する。 ④議論 賛成・反対に分かれて判断の根拠について意見交換を行う。 ⑤最終判断 最終的に判断した事をワークシートに記入する。	・読み取りに誤りがないように、登場人物、問題の背景、葛藤内容や道徳的倫理的価値等を共通理解させる。 ・共通理解のためにバズセッションを利用する。 ・書くことで，判断の根拠等をはっきりとさせる ・議論のマナー等について指導する。（特に互いの立場の尊重） ・立場を変えることも可能である事を伝える。	・生徒の中にファシリテーターの役割を果たそうとする者を見いだす。 ・意見が深化するような質問を投げかける。	・討論型授業に慣れるために身近な話題を導入では扱う。 ・意見を変える場合の合意が、方法、理解、価値のいずれに関する合意かとらえる。
展開 ３５分	・資料②について導入と同じルーチンですすめる。			
まとめ ５分	・授業の感想を記入する。		・纏めの話はしないように注意する。	・ワークシートの回収。

１０　その他

ジレンマの一分類方法ついて

①ハイリスク・ハイリターン型ジレンマ

②公の利益、責任・私の利益、責任型ジレンマ

③短期的利益・長期的利益型ジレンマ

④人間関係重視・合理性重視型ジレンマ

⑤既存のルール・新規のルール型ジレンマ

⑥平時の利便性・非平時を想定した不便さの許容型ジレンマ

※ジレンマ状況に陥った場合正解はないため、日頃からの備え、すなわち備災が重要になることを知らせたい。被災で表面化する人間関係や防災管理上の問題は、平時に潜在的に存在している。特に生徒の中には、先の被災時に、見たくない大人の立ち居振る舞い（見せたくない大人の立ち居振る舞い）を見てきている者も多い。平時から思考や感情についても、トレーニングが必要であることを知らせたい。

別添資料13－2

熊本県立東稜高等学校　防災係

防災教育（Ⅳ）事前資料①

知のコミュニケーションの場、防災教育（Ⅳ）にようこそ

反論や批判を恐れる必要はないのです。違って当たり前です。違うことが大切なのです。考えとその背景にある価値観のぶつかり合いが、皆さんのheartとmindを高めます。大いに対話を行いましょう。

対話は会話とは違います。皆さんを見ていると、会話もさることながら、対話が激減しているように思われます。対話しているところをほとんど見かけません。

ここで言う会話とは「仲良しグループの内輪で行いおしゃべり」のことで、対話とは、「自分とは異なる価値観を持つ他者と行う議論」の事です。対話は、自己の内面と向き合い感情や思考を深化させる効果を持っています。対話により他者と共に生きるための自制を伴った開かれた個が作られ、「より良く生きる」事に繋がります。

議論になれていない君たちが熱くなるのは、仕方ないことですが、以下の点に気をつけてください。

⓪正解を無理に探そうとしないこと

①感情だけではなく、出来るだけ論理で話すこと

②因果関係なのか相関関係なのかを意識すること

③論点が方法、理解、価値のいずれなのか明確にすること

④最後に自分の意見に固執しすぎないこと

価値観や異なる背景を背負った人々が、非常時に集う避難所では、他者と共に生きるための自制を伴った開かれた個の確立が大切です。

皆さん、大いに、対話をしましょう。

※気になった部分にアンダーラインを引いてください。

知に支えられた真の共感を

（略）新しい情報メディアは個々の人々の生活スタイルだけでなく、事実や真実をめぐる人々の感覚やその共有の仕方をも変貌させつつあります。事実にもとづく反論や丹念な論証よりも、感情に訴える一方的な断定が大きなうねりとなり、偽りの共感を生みだしてしまうのです。（略）新しい情報通信の環境を私達が人類社会をより良くするためにポジティブに活用できるのか、それとも制御ができず自滅してしまうのか、その分水嶺に立たされているのです。ここで皆さんにまずお伝えしたいことは、「言葉を大切にしよう」ということです。情報の海に溺れて飲み込まれてしまうのではなく、知に裏打ちされた言葉を自ら鍛えあげ、新しい推進力や想像力を生み出していく必要があります。他者の立場をよく理解しよく考えた上で心のこもった言葉を使うという行為が、ないがしろにされているように思われます。今こそ、知のもつ力を強く信じ、他者を尊重し、丁寧に言葉を吟味し、冷静な対話を通じて、確かな共感、すなわち「知に支えられた真の共感」を作りあげ、広げていく努力を惜しんではならないのです。

（略）このように有限化した地球、すなわち「小さくなった地球」、において、個々の人々は自由で活発に活動しながらも全体として調和のとれた発展を実現するにはどうすべきなのでしょうか。その答えは決して、世界全体を一つの価値観で塗りつぶす均質化ではないはずです。個々の多様な文化や伝統を大切にしつつ、むしろその多様性こそが、全体を強靭にする原理として活用されるべきなのです。

（略）教室で発言することです。質問は大いに結構。先生方は、皆さんが口を開くのを待っています。はじめはうまく発言できず尻込みしてしまうかもしれません。しかし上手にできるまでは人前でやらないというならば、いつまでも上手にはなれません。大学の教室は、知のコミュニケーションの場です。その場に参加する醍醐味を味わってください。多様性が許され、個性が歓迎されるということを知ってください。そこが高校までとは決定的に違うところかもしれません。自分と異なった意見を知って、ハッとする体験がとても重要です。いわゆる「空気」が変わるこうした瞬間を体験することを通じて、「多様性を尊重する精神」を育んでください。この多様性こそが新たな知を生みだす原動力、すなわち東京大学の卓越性を支えているのです。

そして、この精神こそが、知に支えられた真の共感の基礎なのです。

　　他者を思いやり、互いを認め合いながらも、異なった意見が言えるためには、自由な場が必要です。東京大学は、キャンパスにおいて、少数派かもしれないと思う人々が堂々と発言し、行動できる、そのために必要な環境を進んで提供していきます。（略）

平成29年度東京大学学部入学式 総長式辞
東京大学総長 五神 真

別添資料13－3

熊本県立東稜高等学校　防災係
防災教育（Ⅳ）資料

学習シート

君ならどうする

フェーズ１

Ａ君　・　Ｂ君

■理由、逆の立場への疑問

■メモ（話し合いの中で、共感や疑問、反論、感じたことを記入してください）

Ａ君	Ｂ君
カウント（なるほどと感じた意見が出たときに、正の字を書いてください）	

フェーズ２　議論を通して、どのように考えたかを記入してください。

Ａ君　・　Ｂ君

理由 打開策

自己評価

	強く当てはまる				全く当てはまらない
資料①は心に響きましたか	5 －	4 －	3 －	2 －	1
積極的に考えることが出来ましたか	5 －	4 －	3 －	2 －	1
自分の考えを持つことが出来ましたか	5 －	4 －	3 －	2 －	1
議論の中で、考えが深まりましたか	5 －	4 －	3 －	2 －	1

資料①

君は、高校バレーボール部の監督です。明日は高校最後の大会ですが、選手起用に迷っています。

同じポジションのＡ君とＢ君。どちらか一方しか出場できません。

身長も高く、身体能力も高いＡ君。２年生の途中から入部してきた選手。プレーの上達が早く、攻撃能力は高い。得点が期待できる。だが、練習をよくサボったり、生活態度に問題が多く、成績面でも心配。

一方Ｂ君は、プレーは平均的で、得点能力はあまりないが、入学以来、コツコツと練習を重ねてきた。チームのために、雑用も積極的にこなしてきた。生活態度も他の生徒の模範となる程。学業面の心配もない。

君ならどちらを、選手として起用しますか。

別添資料13－4

熊本県立東稜高等学校　防災係
防災教育（Ⅳ）資料

学習シート

君ならどうする

フェーズ１

Ａ注意する　・　Ｂ注意しない

■理由、逆の立場への疑問

■メモ（話し合いの中で、共感や疑問、反論、感じたことを記入してください）

A	B
カウント（なるほどと感じた意見が出たときに、正の字を書いてください）	

フェーズ２　議論を通して、どのように考えたかを記入してください。

注意する　・　注意しない

理由 打開策

自己評価

	強く当てはまる				全く当てはまらない
資料⑤は心に響きましたか	5	4	3	2	1
積極的に考えることが出来ましたか	5	4	3	2	1
自分の考えを持つことが出来ましたか	5	4	3	2	1
議論の中で、考えが深まりましたか	5	4	3	2	1

資料⑤

君は避難所の責任者。支援物資は徐々に届くようになったが、物資は不足気味でなんとかやりくりしている状況。そんな中、車中泊の避難者の中に、駐車場でバーベキューを始めた家族がいる。注意するか、注意しないか。君ならどうする。

別添資料13－5

熊本県立東稜高等学校　防災係
防災教育（Ⅳ）資料

学習シート

君ならどうする

フェーズ１

Ａ説得して一緒に避難する　・　Ｂ一人で避難する

■理由、逆の立場への疑問

■メモ（話し合いの中で、共感や疑問、反論、感じたことを記入してください）

A	B
カウント（なるほどと感じた意見が出たときに、正の字を書いてください）	

フェーズ２　議論を通して、どのように考えたかを記入してください。

説得して一緒に避難する　・　一人で避難する

理由 打開策

自己評価

	強く当てはまる				全く当てはまらない
資料⑥は心に響きましたか	5	4	3	2	1
積極的に考えることが出来ましたか	5	4	3	2	1
自分の考えを持つことが出来ましたか	5	4	3	2	1
議論の中で、考えが深まりましたか	5	4	3	2	1

資料⑥

　大地震の後、大津波警報。防災無線では、５分３０秒後の津波到達を繰り返し放送している。高台に逃げる途中の民家の窓に人影があった。家の中には一人の高齢者が。訊くと「津波が本当に来るかわからない。来たら死んでも構わない」と言っていている。説得して一緒に避難しますか、一人で避難しますか。
君ならどうする。

別添資料13－6

熊本県立東稜高等学校　防災係

防災教育（Ⅳ）

年　　組　　号氏名

授業を受けての率直な感想を書いてください。

ご協力ありがとうございました。

熊本県立東稜高等学校　防災係
防災教育（Ⅳ）

授業査定表

ご芳名

以下の項目について、授業を総合的に見て記入してください。

・授業のねらいが生徒に明確に伝わっている　５－４－３－２－１
・生徒の発言や反応を適切に受け止めている　５－４－３－２－１
・生徒とのコミュニケーションの量が保たれている　５－４－３－２－１
・学習に適した環境づくり(場の設定)ができている　５－４－３－２－１
・話すときには生徒を見て話している。　５－４－３－２－１
・生徒の発言や質問をしっかり聞いている　５－４－３－２－１
・わかりやすい発問、指示をしている　５－４－３－２－１
・生徒全体によく気を配っている　５－４－３－２－１
・次の授業の事前連絡がしっかりされている　５－４－３－２－１
・短くポイントを押さえた説明を行っている　５－４－３－２－１
・開始の礼、終了の礼が徹底できている　５－４－３－２－１
・指名の際に生徒が返事を出来ている　５－４－３－２－１
・板書が効果的で、適切である　５－４－３－２－１
・授業の速度が確保されている　５－４－３－２－１
・授業のまとめがなされている　５－４－３－２－１
・適切な声の大きさで授業がなされている　５－４－３－２－１
・一斉指導のよさを引き出す指導となっている　５－４－３－２－１
・スローラーナーに対する配慮がなされている　５－４－３－２－１
・授業時間が守られている　５－４－３－２－１
・生徒の言語活動が確保されている　５－４－３－２－１
・生徒の思考力・判断力が発揮される場面設定が十分なされている　５－４－３－２－１
・発問等に人権的配慮がなされている　５－４－３－２－１

	強く当てはまる				全く当てはまらない
生徒に葛藤状態を与えられていたか	５	４	３	２	１
積極的に考えさせることができていたか	５	４	３	２	１
議論の深まりがあったか	５	４	３	２	１
防災教育として有益であるか	５	４	３	２	１

ご意見、ご感想をご記入ください

お忙しい中貴重な時間を割いてご参観いただきありがとうございました

別添資料13－7

20180129

防災係

防災教育（Ⅳ）　葛藤事例を用いた思考実験討論型授業　報告書

平成３０年１月２３日（火）
１４：００～１５：００
学習室３
３年生１２名　１年生１名
指導者　竹中　京一

今回の授業で採用した葛藤事例

大地震の後、大津波警報。防災無線では、５分３０秒後の津波到達を繰り返し放送している。高台に逃げる途中の民家の窓に人影があった。家の中には一人の高齢者が。訊くと「津波が本当に来るかわからない。来たら死んでも構わない」と言っている。説得して一緒に避難しますか、一人で避難しますか。
君ならどうする。

１　授業の評価（生徒）

	強く当てはまる				全く当てはまらない
	５	４	３	２	１
資料は心に響きましたか	１２	１	０	０	０
積極的に考えることが出来ましたか	１０	３	０	０	０
自分の考えを持つことが出来ましたか	１１	２	０	０	０
議論の中で、考えが深まりましたか	１２	１	０	０	０

２　判断の変化と代表的な根拠

	フェーズ１	フェーズ２
説得して一緒に避難する	６名	４名
一人で避難する	７名	９名

説得して一緒に避難する	一人で避難する
①一生後悔する ②自己嫌悪に苛まれる ③高齢者の家族が悲しむ ④本当に死にたいと思う人はいない ⑤人の役に立ちたい	①自分の命が最優先 ②助けた後の高齢者の生活が心配 ③現実はドラマのように甘くない ④自分の家族に心配をかける ⑤２人死ぬより１人の方が被害は小さい ⑥５分で説得は無理 ⑦他人を危険に巻き込むことをら高齢者は望んでいないはず

３　授業の感想（生徒）

①様々な意見が出て、視野が広がり、理解が深まった。普段起こらない事が起こってしまったときに、人間は正しい判断が出来るのか、良心は本当に働くのか不安に思った。津波てんでんこに反対する人も多かったが、実際の状況ではどうなのだろうと思った。前もって決めておくことが大切であると思った。

②自分の立場、他人の立場、仮の立場から議論し、意見を聞くことが出来て、有意義だった。絶対と思っていた立場が、反対の立場の意見を聞いて、自分が反対の立場の意見を述べることが出来る事に気づいた事に驚いた。周りの意見を聞いて自分の意見をより良いものにしていく事が大切であることを学んだ。最後に配られた階上中学校の梶原さんの答辞は心にしみた。自然災害は人の力ではどうしようもないとわかっていても、前を向いて進むことが大切なのだと思った。

③自分の考えもしない意見が出たが、とても納得することが多くあった。自分の意見を持つことも大切であるが、相手の意見を聞きお互いが納得し、尊重していかなければいけない。クラスの人たちや先生方にもこの話し合いをしてもらいたいと思った。討論形式だったので、内容が頭によく入ってきた。討論を授業で増やしてもらいたい。選択した理由を論理的に述べて相手に考えが伝わるようにしたい。

④説得して一緒に逃げるという意見をずっと貫くつもりだったが、話し合いを通して考えが変わった。自責の念に苛まれると思っていたがきれい事だった。自分の命を最優先しなければならないときもあると思った。他人の意見を聞くことの大切さを実感した。とても良い経験になった。

⑤価値観の違いでここまで議論することになるとは思わなかった。自分の考えに拘りすぎず他人の意見も取り入れて、判断や処理、行動すべきだと思った。一方でそのときになってみないとわからないと思った。柔軟に対応したい。バレー大会の議論では、意見が変わった。

⑥とても有意義だったが、どちらが正しいか判断がつかなかった。実際の場面では行動出来るか自信がない。対処能力を高めるため、勉強して教養を身につけて行きたい。またこのような授業を受けたい。

⑦率直な意見として、一人で避難する方を選ぶ。しかしそれは一つの価値観であるとわかった。場合のよっては変わる事がわかった。人生に活かしたい。

⑧自分とは全く違う意見を聞くことが出来た。ためになった。大学でもこの経験を活かしたい。自分の意見を言葉にして纏めることは難しい。苦手だ。少しでも出来るようになりたい。最後の答辞を読むとうつむいてばかりもいられない。まず自分たちが変わらなければならないと感じた。

⑨意見が次々に言える人をすごいと思った。自分には意見はあってもそれを言葉にして言うことが出来ないし、違ったらどうしようと思ってしまう。先生がおっしゃったように震災は平等に降りかかってくるので、一人一人の意見が大切であると思った。意見を口に出して言うのは必要だと思った。参加できて良かった。

⑩今まで防災について考えてきたつもりだったが、自分の意見を改める事が出来て、良い機会だった。また議論を行うことで、人との価値観の違いも生じて、それに対応しなければならないという点も面白く、参加して良かった。

⑪価値観が全く同じ人はいないんだなと思った。だから１００％みんなが納得できる答えもないと思った。自分と異なる意見が出たとき同意できる場面がいくつもあった。また意見を衝突させて出てきた意見がしっくりくる気がした。人として成長できた気がした。大学ではもっと議論する機会があると思うので、自分の意見を発信し、他人の意見を取り込んでいきたい。今回の防災教育をとおしていろいろと学ぶことが出来ました。ありがとうございました。
⑫自分の思っていたことが正解でないことに気づいた。今までこのように考える授業をしてこなかったので頭が疲れた。
⑬他人の命を優先したいという思いが伝えられて本当に良かった。自分の命が助からないと意味がないという意見に１ミリも賛成できない。私は将来他人のためになりたい。大切なことを学んだ授業だった。学習させていただきありがとうございました。

４　授業の評価（職員）

	強く当てはまる				全く当てはまらない
	5	4	3	2	1
生徒に葛藤状態をもたらしていたか	3	0	0	0	0
積極的に考えさせることが出来ていたか	3	0	0	0	0
議論の深まりがあったか	2	1	0	0	0
防災教育として有益であるか	3	0	0	0	0

５　授業の感想（職員）
①意見を発言しやすいような雰囲気が（事前に）作られていた。防災教育にかかわらず授業を行う上で大切なことを学んだ。津波てんでんこや最後の中高生の言葉などの資料も今回の授業と合っていて、勉強になった。
②生徒が自分の意見をしっかりと述べていた。多様な意見が出てそれを尊重される様子が見られた。普段から災害について考え、備災を意識していくことが必要であると感じた。
③生徒が楽しんで参加していたことが印象的だった。まさに知のコミュニケーションの醍醐味に触れたのだと思う。あれだけの少人数でも多様な意見が出されこの授業の可能性にはまだまだ広がりがあると感じた。当たり前と思っている自分の価値観を揺さぶられる体験は、多様性の許容力へと繋がるのだと思った。この授業ではファシリテーターの役割が大きいと思った。反対意見が出にくかったり、方向が本題と違う方向へ行ってしまったりしたとき、沈黙が長く続くときなどファシリテーターの力が必要と思い、自分がその立場だったら・・・と考えながら参観した。今回のような深い議論は他言語では難しいと思われるが、「自分はどう考えるか」「他人の意見をどう受け止めるか」を軸にしたディベート活動を目標に検討したい。

５　自評
①最大の反省は、私自身の発言に余分なものがあった点である。議論の交通整理のみに努めるべきであったが、余分な発言があった。また、議論の交通整理のスキルも十分とは言えず、ファシリテーターとしての経験値や哲学的素養などに問題があった。生徒⑨の中で

「違ったらどうしようと思ってしまう」と言う感想が寄せられたが、このように思わせないような事前の指導も不足していた。このような正解主義の弊害とも言えるミスを極端に恐れるよい子を演じていたいというこ生徒の意見をすくい上げ、相互承認の中で自信を持たせることを心掛けたい。
②避難放棄者の真意を探る動きから判断の正確性を高めようとした生徒もいた。津波てんでんこの話題も途中で出てきたが、生徒は議論の中で、津波てんでんこの倫理的４つの側面である①自助原則の徹底②他者避難の促進③相互信頼関係の事前醸成④生存者の自責の念の軽減の内①、②、③の内容について発言しており、ある程度の議論の質は担保できたと思われる。上から目線や外から目線の意見はなかった。議論の途中で、揺さぶるための発問をする必要もなかった。惜しむらくは、時間が十分に取れなかったことと私自身の力量不足で議論の深化がなかった事である。今回生徒から出された意見から、
ａ目的で手段は正当化されるのか
ｂ自分のために人を救うことは正しいのか
ｃそもそも正しいとはどういうことなのか
ｄ正義は決められるのか。決められるならばそれは、数、手段、目的、状況、それとも何によるのか。
ｅ命は手段かそれとも目的か
など様々な貴重な機会があった。
③今回の葛藤事例を用いた思考実験討論型授業は、思考力、判断力、表現力の養成、学力向上に極めて有効であると判断できる。葛藤事例は防災に限らず、様々な分野に存在する。授業の冒頭でトレーニングのために用いたスポーツにおける葛藤事例もその一つである。トレーニング問題から大いに議論は盛り上がった。大きな可能性を秘めていると思われ、今後の研究と実践しだいである。

君は、高校バレーボール部の監督です。明日は高校最後の大会ですが、選手起用に迷っています。
同じポジションのＡ君とＢ君。どちらか一方しか出場できません。
身長が高く、身体能力も高いＡ君。２年生の途中から入部してきた選手。プレーの上達が早く、攻撃能力は高い。得点が期待できる。だが、練習をよくサボったり、生活態度に問題が多く、成績面でも心配。
一方Ｂ君は、プレーは平均的で、得点能力はあまりないが、入学以来、コツコツと練習を重ねてきた。チームのために、雑用も積極的にこなしてきた。生活態度も他の生徒の模範となる程。学業面の心配もない。
君ならどちらを、選手として起用しますか。（導入時に用いたトレーニング問題）

④自分で判断をした経験が多い生徒ほど学力は高まると言われている。今回の授業で、生徒は様々な価値観に触れ、内面を揺さぶられた。葛藤状態の中で判断を迫られた。生徒の授業での活発な議論の様子や感想から、防災教育や葛藤事例を用いた授業の可能性を感じた。同時に東稜生の可能性も感じた。自分自身の力量の問題である。